

Title	仏教寺院の近代化と地域社会：福岡県篠栗町の事例から
Sub Title	Modernization of the Buddhist temple and the local society : case of Sasaguri town, Fukuoka prefecture
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.77 (2014.) ,p.177- 211
JaLC DOI	
Abstract	<p>This paper studies the modernization of the Buddhist temple Nanzō-in 南蔵院in Sasaguri town, Fukuoka Prefecture, Kyushū, as well as its socio-religious relationship with the local society. The temple belongs to the Shingon sect 真言宗 and is the first of 88 pilgrimage sites, fudasho 札所, replicas of the Shikoku Reijyō 四国霊場 based on the Kōbō Daishi belief 弘法大師信仰 . According to legend, the Sasaguri pilgrimage sites were founded in 1835, and they flourished until the Meiji Restoration in 1868. According to the Meiji government's political order for the separation of Buddhism and deity belief, the socio-religious system of pilgrimage in Sasaguri radically changed and gradually declined. Local people conceived the idea of requesting to headquarter of the Shingon sect located at Mt. Kōya. In 1899, Nanzō-in temple migrated from Mt. Kōya to Sasaguri and was afforded the supreme status of a pilgrimage site. During the Meiji period, Nanzō-in was supported by the local society and outsiders, including laborers from the coal mining industry. Thus, the temple experienced the modernization.</p> <p>This paper primarily explains the history of the temple, socioeconomic background, the change in belief systems, the leadership of the main monk, and the transformation of the relationship between the temple and local society. Nanzō-in temple is a religious complex comprising a main temple, Daishi-dō dedicated to the religious founder, small shrines, a large statue of Hudō-myōō 不動明王, and stone images of numerous bodhisattvas.</p> <p>We discuss radical changes in the temple's character from supplication and prayer in this world to appeasing dead spirits in the other world. After the construction of the large bronze image of the "Enlightenment Buddha" in 1995, Nanzō-in transformed into a commercial temple and focused on conducting religious services for the storage hall of the bones of the dead, the Nōkotsudō. This is a new business for the temple. Nanzō-in encompasses various believers from ascetics to pilgrims and go toward the "Engaged Buddhism" movement.</p> <p>This paper also focuses on the "invention of tradition" and the modernization of Buddhism supported by the local society to establish the function of the temple's social capital. In conclusion, we discuss the negotiation between external and internal society and its inhabitants.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000077-0177

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

仏教寺院の近代化と地域社会

—福岡県篠栗町の事例から—

Modernization of the Buddhist Temple and the Local Society: Case of Sasaguri Town, Fukuoka Prefecture

鈴木 正宗*

Masataka Suzuki

This paper studies the modernization of the Buddhist temple Nanzō-in 南蔵院 in Sasaguri town, Fukuoka Prefecture, Kyushū, as well as its socio-religious relationship with the local society. The temple belongs to the Shingon sect 真言宗 and is the first of 88 pilgrimage sites, *fudasho* 札所, replicas of the Shikoku Reijyō 四国霊場 based on the Kōbō Daishi belief 弘法大師信仰. According to legend, the Sasaguri pilgrimage sites were founded in 1835, and they flourished until the Meiji Restoration in 1868. According to the Meiji government's political order for the separation of Buddhism and deity belief, the socio-religious system of pilgrimage in Sasaguri radically changed and gradually declined. Local people conceived the idea of requesting to headquarter of the Shingon sect located at Mt. Kōya. In 1899, Nanzō-in temple migrated from Mt. Kōya to Sasaguri and was afforded the supreme status of a pilgrimage site. During the Meiji period, Nanzō-in was supported by the local society and outsiders, including laborers from the coal mining industry. Thus, the temple experienced the modernization.

This paper primarily explains the history of the temple, socioeconomic background, the change in belief systems, the leadership of the main monk, and the transformation of the relationship between the temple and local society. Nanzō-in temple is a religious complex comprising a main temple, Daishi-dō dedicated to the religious founder, small shrines, a large statue of Hudō-myōō 不動明王, and stone images of numerous bodhisattvas.

We discuss radical changes in the temple's character from supplication and prayer in this world to appeasing dead spirits in the other world. After the construction of the large bronze image of the "Enlightenment Buddha" in 1995, Nanzō-in transformed into a commercial temple and focused on conducting religious services for the storage hall of the bones of the dead, the Nōkotsudō. This is a new business for the temple. Nanzō-in encompasses various believers from ascetics to pilgrims and go toward the "Engaged Buddhism" movement.

* 慶應義塾大学文学部教授

This paper also focuses on the “invention of tradition” and the modernization of Buddhism supported by the local society to establish the function of the temple’s social capital. In conclusion, we discuss the negotiation between external and internal society and its inhabitants.

Key words: modernization, Buddhist temple, pilgrimage, social capital, storing the bones of the dead

キーワード：近代化，仏教寺院，巡礼，社会関係資本，納骨堂

1. 問題の所在

福岡市の郊外，篠栗町に展開する新四国八十八ヶ所霊場は，数多くの巡礼者を集める信仰の場である（図1）。その中心は篠栗山南蔵院で，高野山真言宗別格本山の格式をもち，霊場の総本寺であると共に札所の第一番であり，年中行事も数多く参詣者が一年中絶え間なく訪れて賑わいを見せている。ブロンズ（青銅）製としては世界最大とされる「釈迦涅槃像」は人々の注目を集め，国内の信者だけでなく，海外からの観光客の訪問も多い。参道には沢山の土産物屋や茶店が立ち並び，境内には様々の神仏が祀られ，奥之院には滝行場もあるなど，俗性と聖性が交錯する。住職の笑いと教訓に満ちた法話には人氣があり，毎月の護摩供養に通う信者も多い。南蔵院は現代でも精力的に活動を展開する仏教寺院である。

本稿は，南蔵院を事例として，仏教寺院が伝統の枠組みを維持しながらも，時代変革の荒波を潜り抜けて，「近代化」してきた経緯を検討し，将来への展望を探る。合わせて，地域社会の内部と外部が南



図1 篠栗町と南蔵院

[出典 <http://kotomachi.exblog.jp/i70>]

蔵院を巡ってどのように関わりあってきたのか、そこから何が言えるのかも考えてみたい。南蔵院の活動を通じて、大きな時代の流れの中での社会変動の諸相を明らかにすることも本稿の目的である¹⁾。

2. 南蔵院の出現—林覚運の時代

篠栗新四国霊場の発祥は、伝承によれば、天保6年(1835)に早良郡姪浜(福岡市西区)の尼僧の慈忍が弘法大師の霊蹟を訪ねて篠栗にきて²⁾、城戸の平家岩の洞窟に草庵を営んで滝修行をし、里人に弘法大師の教法を布教して、霊徳を得て、当地に新四国八十八ヶ所霊場の草創を発願し、人々の浄財で二十体(十八体とも)の仏像を刻して安置したことに始まる³⁾。慈忍は志半ばで当地を離れたが、田の浦の住人の藤木藤助が意志を継いだ。藤助は、弘法大師留錫の地とされる若杉山の修験であった石井坊賢貞に師事し、嘉永3年(1850)に再興を発起して、篤志家の浄財を集めて仏像を刻み、八十八体の仏像を刻んで、各札所に配置して、安政2年(1855)に霊場を完成したという。

しかし、明治の神仏分離で平安時代以来の霊山とされた若杉山の社寺は、太祖神社を主体とする神道化で再編を余儀なくされ[鈴木2013: 102-103]、篠栗霊場は廃仏毀釈の影響で明治19年(1886)に県令で廃棄が命じられて危機に瀕した。これに対して、地元の人々は約10年間にわたって霊場存続の運動を展開した。明治31年(1898)7月13日に霊場の組織として金剛会の規則が定められ⁴⁾、霊場の再興の動きが本格化した。当時の村長の藤喜一郎の尽力で⁵⁾、高野山の真言宗大本山金剛峯寺に請願して、千手院谷640番地にあった南蔵院の寺格を移して霊場の総本寺とし、八十八ヶ所霊場の札所の堂宇境内を南蔵院の飛び地として登記して寺院の形態を整え、明治32年(1899)3月に正式に認可を得て[西1982: 75]、9月に四畳半の仮堂を建立して、危機を乗り切ったとされる⁶⁾。各札所の堂守は基本的に農家が引き受け、使用権は特定の個人が相続していく体制が作られた。南蔵院の篠栗での初代住職には林覚運(明治8年(1875)生)が招かれた。林覚運は高野山千手院谷の本覚院稲葉堯運の弟子で、本覚院の覚と稲葉堯運の運を合わせて覚運とした。代々の住職の名前に入れ込む「覚」の字は南蔵院の本寺の本覚院に由来する[佐々木1976: 7]。高野山の本覚院の開基は、法然の十大弟子の一人の行空と伝えられ⁷⁾、南蔵院はその流れを引いて、林覚運は21代目にあたるという。

篠栗の南蔵院は当初は小堂の「城戸川端堂」で⁸⁾、現在の大師堂付近にあった仮堂であった。南蔵院の招聘を巡っては、弘法大師留錫の伝説を持つ若杉山が関与していた形跡がある。当時の若杉では、明治31年(1898)に廃寺であった勝泉院の再興の議が起こり、古堂跡に小舎を建立して「南蔵院」とし、別称を「西野山奥院」、つまり「西の高野山」としたという[合屋1957: 131]。若杉集落が仲介して寺格を城戸へ持ち込んだ可能性もある。若杉山は「篠栗霊場の奥之院」と位置付けられ、南蔵院と共に霊場の中核を担った⁹⁾。若杉山奥之院は「番外」に組み込まれたが、善無畏や空海の留錫伝承があり、徐々に重みを増して、霊場復興の原動力となった[鈴木2013: 88]。

篠栗霊場は春と秋の彼岸頃には巡拝者で賑わいを見せ、第一番札所の南蔵院は有力寺院として定着した。城戸は篠栗霊場の開創者とされる慈忍が、谷の奥の不動の滝で修行して、霊場創始の霊徳を得た地であり、この地に寺を再建した南蔵院が札所第1番とされた。篠栗の人々は、小祠や小堂ではなく、権威を持つ仏教寺院を霊場の頂点に据え、「模範的中心」exemplar centerを作りだすことで、近代に生きる仏教と民間信仰の新たな橋渡しを画策した。個々の札所や遍路道の住人は、外部から参詣に訪れる巡礼に対して、無償の「接待」でもてなせば「功德」を得ると確信し、「互酬性」reciprocityの関係を構築することで新たな生活リズムを確立したのである。その中では、霊場を巡って物乞いをもっぱらにす

る乞食の遍路も許容した。霊場の中心となった南蔵院は、高野山から篠栗に移ったことで、外部から内部へと、配置を大きく変えたが、外界との接点としての働きを持続し、常時、外部や周縁の力や人間の助けを得て、「近代化」の状況に対峙し、時代と共に生きることになった。そこに働くのは篠栗の内部と外部を巡る緊張の力学である。

林覚運は粗末な仮堂の草庵を寺院として活動を開始し、弘法大師の遺徳を伝えて布教に乗り出して、九州各地を転々としてほとんど寺に帰らず、説教で多くの信者を獲得したという。また、幻燈や映画で「御大師様の生涯」という作品を制作するなど、近代的な説教の技法も取り込んで視覚に訴え、後には映画プロダクションも設立した近代主義者であった〔佐々木1976: 7〕。ただし、布教に金銭を惜しまなかったため、寺の財政状況が悪化し、境内地が人手に渡ったりしたとされる。妻のマサエは明治19年(1886)八女の生まれで、お茶の製造と卸売を営む問屋の娘で、博多で育った。商売がうまくて、喧嘩の仲裁をしたり、花札をやるなど、女傑のようで、留守を巧みに切り回していたという(昭和48年(1973)86歳で歿)。内助の功で南蔵院は維持されてきた。

当時の篠栗は、炭坑の町として栄えていたので¹⁰⁾、南蔵院は篠栗霊場の総本寺としてよりも、日々危険と向き合って仕事をする坑夫の信仰を集め、「炭坑の寺」として地域社会に受け入れられた。大正時代(1912-1925)は石炭の採鉱の最盛期で、篠栗の周囲の福岡・佐賀・山口などに炭坑地帯が広がっていて、近くに戦前では日本の最大規模の筑豊炭田があり、糟屋炭田も近接していた。篠栗には津波黒炭坑があった。南蔵院は危険で苛酷な仕事に従事する炭坑労働者から多くの信者を獲得し、個々人の悩みや不安に対応した。大正12年(1923)は弘法大師御降誕千五十年慶賀記念で、巡礼ブームが訪れて賑わいを見せ、篠栗は新四国霊場として整備されて隆盛に向かった。大正15年(1926)に不動の滝の脇に小堂を建てて、「お通夜堂」と称した。真剣な願い事をする信者は、この御堂に籠って滝行をすることが多かったという。現在の第45番札所、城戸滝不動堂で、南蔵院の奥之院とされる。

当時の炭坑には朝鮮の人々が極悪な手配師に連れてこられて、劣悪な状況で沢山働いていた。彼らの多くは騙されたり、強制的に徴用されたりして、地獄のような環境で働かされていたのである。林覚運は八木山峠を越えて筑豊炭坑に向かう途中で、南蔵院を通りかかる沢山の朝鮮人に、飲み物をあげて休ませ、食べ物を施し、冬には着物をあげて助けた。そして、つらいことがあれば逃げて来い、私が命をかけて守って、生きて帰れるようにするといっただけで、実際に多くの人を救出したという。この地域の山は盆地状になっていて、労働者が逃げられないように女衛を配置して、隔離されていたが、南蔵院は唯一の逃げ場であった。林覚運は炭坑に赴いて、納屋のような所に泊まって、日夜布教して歩いていた。炭坑で働く人々が恩返しとして、崖を開鑿して南蔵院の境内地を拡大し、本堂を建てた時には、裏山を削る困難な作業に従事してくれたという。

当時の林覚運の様子は、中村守巳の書いた映画脚本『八木山峠』(1996年第6回菊池寛ドラマ賞受賞作)に描かれている¹¹⁾。炭坑主に連れられ、八木山峠を越えて筑豊炭田へとたどる浮浪者たちが、南蔵院の前を通りかかる。住職は、浮浪者の中の傷ついた半纏姿の二人の若者に声をかけ、面倒を見て、巡礼の行衣の笈を掛けて送り出す〔中村2004: 23-26〕。創作ではあるが、実際の状況を描いた作品だという。後に、韓国語に翻訳されて評判を高めて韓国との交流の役に立った。南蔵院は篠栗霊場として地域の内部に位置付けられながらも、巡礼や炭坑夫など、外部の人々によって支えられ、地元の経済を活性化することで生きてきたのであり、この傾向は現在まで継続している。

大正時代は、巡礼に来る人も増えて、遍路は福岡、佐賀、長崎など、北九州からの参詣が増加し、南

蔵院は「篠栗四国本寺」と呼ばれ、大正14年（1924）には『篠栗四国名所案内』が出版されて巡礼の便宜が図られた。林覚運には女性の弟子が多く、その中には霊能祈禱師もいて、熊本、長崎、宮崎などに居住し、春の巡礼の季節にはよくお参りにきていたという。昭和期に入り、地元でも巡礼への対応の組織化が迫られ、昭和8年（1933）11月1日付けで各札所を会員とする「霊場会」が形成されて、規則を策定した¹²⁾。この組織を母胎にして、昭和10年（1935）には、篠栗霊場草創百年の記念行事が盛大に行われた。戦争の時代に突入すると、戦勝祈願、戦意高揚、武運長久の祈願が増え、巡礼者の多くは兵士の無事帰還に願いを籠め、霊場は「願かけ」で巡る人々が多かった。林覚運は終戦直前の昭和20年6月30日に70歳で亡くなり住職不在となった。後継ぎとされた林覚雅は召集されたまま帰還せず、戦死したとされ、南蔵院は廃絶か他の寺院の手に渡るかの危機に直面した。

3. 南蔵院の隆盛—林覚雅の時代

南蔵院の篠栗での第2代目の住職は、大正14年（1925）の生まれの林覚雅（1925-1989）で8歳で得度、戦時中は召集されて戦地に赴き、終戦後は朝鮮で迎えて捕虜収容所に入れられた。帰国時には先代の林覚運は亡くなっていて、20歳で跡を継いだ。林覚雅は、先代の5人の子供のうちの4男（本名は四郎）で末子であったが¹³⁾、親が生きているうちから見込まれていた。昭和21年（1946）3月21日に南蔵院住職となり、昭和23年3月に高野山大学を卒業して、しばらくの間は篠栗小学校教諭（昭和23年～25年）を務めた。教員になった昭和23年に八女出身の野田敏枝（1926年生まれ）と結婚した。野田の実家はハゼの実から天然蠟を精製する野田製燭で、髪付け油や蠟燭、ポマードやチックに応用され、「野田の木蠟」は全国に知られ当時は日の出の勢いだった¹⁴⁾。野田の実家の母が南蔵院にきた時に覚雅にはれ込んで、半ば強制的に嫁になったのだという。林覚雅は、寺院の法事が忙しくなり、昭和25年に教員をやめて寺に戻った。活動は説教から講演へ移行し、「場を見て法を説け」として宗教色を薄めて漫談風にし、企業からの講演にも応じて人気があった。

昭和20年代から30年代は、巡礼の全盛時代で、篠栗霊場では遍路が「御接待」を受ける慣行も復活し、「善根宿」として宿泊を提供する慣習も各地で行われていた。南蔵院にも多くの遍路や信者がやってきたが、特に4月15日から20日の「百味供養」には、早朝から、風呂に入れ、食事を出して、法要を営むなど多忙を極めた。鹿児島、大分、熊本などから、日々200人から300人がお参りに来て、沢山の石仏にお供えする一円玉のお賽銭の上がりも多かった。また、修行者や巡礼だけでなく、寺にいれば何か貰えると思って居候する人や、接待のおにぎりを何箇所も食べる人もいた。熊本に帰るから何千円くれと要求した人もいた。泥棒もいて酒や果物などを盗まれたという。昭和20年代前半は炭坑で働く人の世話をすることが多く、時には被差別民の面倒も見ると、分け隔てなく付き合ったとされる。

昭和31年に本堂が再建されて落ち着きを取り戻す。昭和45年（1970）に不動の滝の通夜堂を改築して、第45番札所を整備した。当時はお籠りして修行し、願掛けする人が多かったからだという。昭和50年代までは篠栗霊場は賑わいを見せ、春と秋の彼岸の頃に来る巡礼団として、佐賀に200人、小野田に100人、下関に100人の大きな講中があった。3月27・28・29日には石槌山の講社や行者が毎年篠栗霊場巡りにきて、札所との交流も密であった。南蔵院は篠栗の巡礼に訪れる外部の人々への接待を欠かさず、遍路と浮き沈みを共にして生きてきたのである。

林覚雅は南蔵院の復興と興隆に尽くす一方で、福岡宗務支所長（昭和45年～52年）、教育委員会委員長などを務め、昭和48年（1973）には福岡県教育文化功労賞を受けた。昭和59年（1984）の弘法大

師千百五十年^{おんき}遠忌に権大僧正に昇進し、南蔵院名誉住職になる。新たに大師堂を建立する企画を立てて、本堂をそのまま南へ移動させて、空地に大師堂を建立する大改造を行った。本堂は京都の清水寺に似た懸崖^{けんがい}作りとなり、大師堂も完成して、昭和61年（1986）6月11日に盛大な落慶法要を行った。大事業を成し遂げた林覚雅は、平成元年（1989）9月3日に64歳で亡くなった。

本人の弁として、戦後しばらくの間は、「高野山の大学は出ていても、僧侶としての実践はしていなかったのが苦勞した。戒名の付け方も聞いていなかったの、納骨堂にあったほかの位牌を見て似たような戒名をつけたこともある。」というように、実践上の僧侶としての経験は乏しかったが、手探りのようにして徐々に人々の信頼を集めた¹⁵⁾。戦争直後は生活も苦しかったが、誠実な人柄で人望があり、次第に信者を増やしていったという。法話では^{たんと}譬え話がうまく、人を引き付ける魅力があり、カリスマ性を持ち、商売上手であったとされる。寺院の外での法話は、小学校のPTAから始まり、卒業式、婦人会、企業へと広がり、次第に仏教色を薄めていき、「場を見て法を説け」をモットーに入念に準備して行った。自分で文章を書くことは少なかったが、法話の語りは豊富に残され、生前に『仲良うしんしゃい』（国書刊行会、1983）が刊行され、死後に再編集して『とっておきの法話・説法シリーズ』全3巻（子育て説法、人間関係説法、嫁姑の説法。国書刊行会、1995）にまとめられた。題名からもわかるように一貫して説いてきたのは、家族や友人、親と子、嫁と姑など身近な人間関係の絆を強めて、仲良くやっていくことであった。

1986年に林覚雅が、冠婚葬祭業を営む佐久間進（(株)サンレー、代表取締役社長）¹⁶⁾と行った対談では、以下のように語っている [林・佐久間1986: 94-95]。

「人間というのは、誰でもしあわせや生きがいを求めているのです。しあわせや生きがいというのは、人から与えられるものでなく、自分の心で感じとるものなんです…しあわせを感じ取れる環境をつくってあげるのが、宗教家のつとめだと思っています。」

「私は息子にいつもいうんです。南蔵院にきてよかったなあ。もう一度きたいなあ、という気持ちをお参りされる方に持たせて帰しなさい、と。これがお寺の基本です。」

「遍路というのは八十八ヶ所をめぐる人をいいます。巡礼というのは三十三ヶ所をまわる人をいいます。巡礼のほうはただまわりさえすればいいのですが、遍路のほうは八十八の罪障をなくさなければいけないから、修行しなければいけません。修行の中に、接待と精進というのが入ってきます。」

「行というのが精神なんです。実行するか、しないか、ということです。」

「接待というのは、人を喜ばしさえすればいいのです。人のために役に立てばいいのです。笑顔も、ありがとうのひとつも接待です。だから、人と接するときに、にこやかな笑顔で接すればいい訳です。」

「自分自身に対する不安、つまり、自分に自信を持ってないようです。これがどこからきているのかと、私もよく考えてみたんですが、これは戦後の教育のあやまりでしょう。なんでもしてもら、やらしてもらということが一番大きなあやまりでしょう。」

「宗教に凝りますと、変な宗教になってしまいます。だから、私は宗教ということばは嫌いなのです。いかに生きるべきかを考えるために、何かを信仰すればいいのです。信仰の対象はなんであってかまわないのです。」

「昔はお寺が集落の中心だった訳ですが、やがて学校がお寺に代わり、その学校もバラバラになってきましたから、いまは集落の寄り合いというのがなくなったのです。これがいまの隣人関係とかの混乱の原因になっていると思います。」

「形をつくって、心を鍛えるか。心を中心にして、形をつくるか。私などが心の面をやればいい訳です。」

林覚雅は、しあわせや生きがいを求め、如何に生きるべきかを模索している人々に対して、人生の指針を心で感じ取れる寺院や霊場を作り、接待と精進、修行を通じて社会の絆を再構築することを目的として活動した。寺院や僧侶は、人生の生き方を指し示す役割を果たす。この主張には、真言宗の教義よりも、大師信仰に支えられた「生活の中の仏教」の実践を重視し、篠栗新四国霊場の風土に根差した地域の力を掘り起こして、新たな人間形成を目指そうとする意図が込められている。林覚雅の時代は、巡礼の全盛期であり、南蔵院は、地元の人々の不安に対処しただけでなく、外来者、特に遍路の世話や面倒をみることで、祈禱寺としての機能を十分に果たしていた。地域社会の内部と外部の接点にあって、人間同士の社会的な絆を作り上げる役割を担っていたのである。

4. 釈迦涅槃像の登場—南蔵院の転換—

現在の住職は、篠栗では3代目、通算23世の林覚乗（1953年生）である。1976年に高野山大学密教科を卒業し、高野山真言宗ハワイホノルル別院駐在開教師（76年～78年）を経て、帰国後、昭和52年（1977）に大阪出身の内田文代と結婚した。昭和55年（1980）南蔵院住職となる。福岡いのちの電話顧問、福岡刑務所篤志面接委員、アジア刑政財団評議員等を務めるなど社会的な活動も活発に行っている。

林覚乗は、父親が亡くなった平成元年（1989）以後に、南蔵院の寺院としての性格を、祈禱寺から死者供養や先祖供養のセンターへと大きく転換した。同年に檀家の要請で永代供養を開始した。恐らく、篠栗霊場の衰退の兆しを感じ取り、時代の流れに臨機応変に対応することに迫られたのであろう。平成3年（1991）に納骨堂の建造と、釈迦涅槃像の造像に着手した¹⁷⁾。そして、平成4年（1992）6月11日に納骨堂として釈迦殿を、平成5年（1993）12月2日に月華殿を建てて、契約の応募を開始した¹⁸⁾。これは釈迦涅槃像を作る費用の捻出に充てるための資金作りでもあった。林覚乗の話では、釈迦涅槃像は当初は鉄製や木造の案もあったという。結局はブロンズ像とし、新日鉄への発注も考えたが、クロタニ

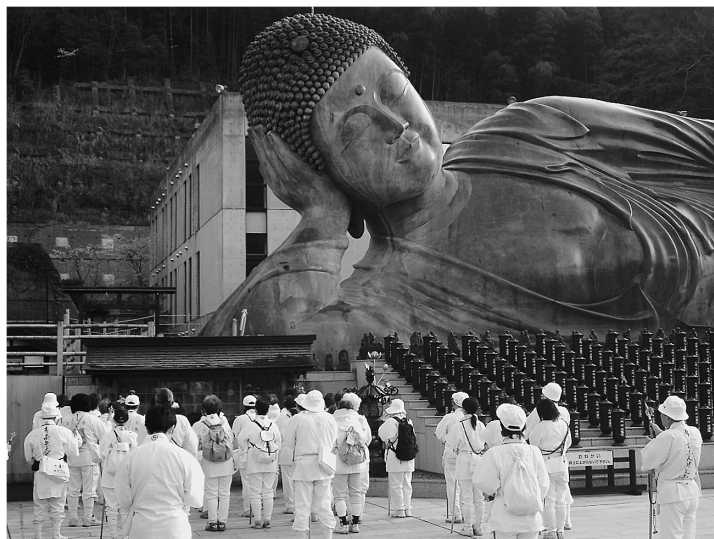


図2 南蔵院の釈迦涅槃像（提供者：中山和久）

コーポレーション（富山県新湊市）に請け負わせた。台座がかなり高価だったという。

平成7年（1995）5月に、二つの納骨堂と同じ敷地内に、巨大な釈迦涅槃像が完成した（図2）。全長41m、高さ11m、重さ300トンで、ブロンズ製としては世界最大である。同年9月2日から10月14日まで「釈迦涅槃像落慶大法要」を行った¹⁹⁾。頂点は、10月7日午前11時から執行した「千僧供養」で、日本国内だけでなく、タイ、ミャンマー、スリランカ、ネパール、韓国などから約1300人の僧侶が出席した。当時のアメリカ大統領のビル・クリントン William Jefferson “Bill” Clinton からも祝辞が寄せられた。「千僧供養」は、無量の功德があるとされる。天平勝宝4年（752）に奈良の東大寺で行われた大仏開眼供養になぞらえて、涅槃大仏の前で法要を厳修した。新たな事業展開への心意気を感じられる。

法要に先だって、南蔵院は、平成7年（1995）8月19日付けの読売新聞朝刊に一面広告を出している。表題は「すべての人に心のやすらぎが訪れることを願って」として「釈迦涅槃像」の巨大な写真が掲載され、「お慶びの詞」として、総本山金剛峯寺座主・高野山真言宗管長の稲葉義猛猊下、「祝辞」として、スリランカ仏歯寺（Temple of the Tooth Relic, Daladā Māligāwa, Sri Lanka）のシャム派のマルワッタ寺院の管長（Mahā Nāyaka Thero of Malwatta, Siam Nikāya）、ランブクウェルレ・スリー・ダンマラッキタヴィパッシー（Ranbukuwelle Sri Dhamma Rakkita Vipassī）の言葉が載せられている。造像の経過として「長年にわたり南蔵院は、ミャンマーやネパールに微力ながら医薬品、ミルク、文房具などを送り続けてきました。その返礼として、ミャンマーの仏教界から、お釈迦様そして、高弟二人の真骨の贈呈を受けました。涅槃像は、その安置所として平成7年に建立されました。」とある。真骨とは仏舎利のことで、釈迦、阿難、目連の三体である。ニューヨークの自由の女神の高さが46mなので、全長41mの釈迦涅槃像は、「女神像を横にした大きさ」と表現するのが適切と説明している。

釈迦が亡くなった時（入滅）の姿を表わす仏像は、涅槃nirvāṇaの状態を可視化したものとして、スリランカや東南アジアなどの「上座部仏教」Theravāda Buddhismの寺院では多く見られるが、日本では余り馴染みのない形式である。仏教の教義に従えば、涅槃とは輪廻saṃsāraを断ち切り、二度と生まれることのない境地に到達したことを表わす。涅槃像の足の裏には巨大な法輪の紋様が描かれて、偉大さが強調されている²⁰⁾。しかし、日本では、釈迦入滅の姿を、輪廻を断ち切り、二度と「苦の世界」に立ち戻る事のない境地に入った姿と考える人はほとんどいない。そもそも、出家至上主義で戒律を重視する上座部仏教と、インド・中国経由の大乘仏教が日本化して、金剛界と胎藏界の両界曼荼羅世界や即身成仏の思想を生み出した真言密教とは、仏教といっても全く異なる。釈迦入滅を表わす涅槃像は、日本では単なる「寝仏」sleeping Buddhaに過ぎず、「新たな釈迦像」の生成として、全く異なった文脈のもとに受容されている。在家仏教の様相が色濃い日本仏教への変容は、釈迦涅槃像の左手から延びる五色の紐にもみられる。紐は焼香台に届いていて、紐の先にさわるとは、釈迦の手に触れることであるという。しかし、五色の紐による作法は、阿弥陀仏に対して、自らが死に直面した時に極楽往生を願う浄土との結縁（臨終行儀）に類似し、新たな解釈である。納骨堂売り出しのキャッチフレーズは「お釈迦様にいだかれて眠るしあわせ」であり、釈迦涅槃像は納骨堂と一体で、釈迦の涅槃は、死者の眠りとして死者供養や先祖供養に読み替えられたといえる。また、胎内には仏舎利が納められて釈迦への帰依が意図されているが、台座の内部には本四国八十八ヶ所霊場の札所のお砂を敷き詰めたミニ霊場があって、霊場の札所の全てに参詣したことになるとされ、弘法大師の「祖師信仰」と共存している。理研産業という会社（本社広島市）の物故者の位牌も収められ、毎年社員の供養が行われる²¹⁾。釈迦涅槃像は日本仏教の異種混雑hybridの表象である。

釈迦涅槃像が異種混淆であっても、高野山真言宗の管長の祝辞と、スリランカの仏歯寺の僧正のメッセージが開眼法要に届けられ、ミャンマーから齎された真骨の「仏舍利」が胎内に納められたことで、南蔵院には正統な仏教の流れを継承した保証が与えられた。正統性の保証は、本来はインドに求めるべきであるが、大陸部では仏教は中世に滅びたので、法統を維持したとされるスリランカとミャンマーの上座部仏教に保証の証しを求める必要があった。しかし、釈迦涅槃像の地下には三途川が流れていて、彼岸の浄土世界を思わせる荘厳な納骨堂があり、死者供養と強く結びついた日本仏教の様相が顕著である。川の北側は浄土世界であるのに対して、南側は娑婆世界で「仲見世」と称するお土産物屋が立ち並び、涅槃像、御神籤、御守り、線香、蠟燭、キーホルダー、住職の法話のDVDやビデオ、CD、饅頭や煎餅なども売られていて、現世に立ち戻る。名物は「福団子」で、カップルにお勧めのお土産は「仲良し地藏銅板」で、二人の名前を刻む。釈迦涅槃像横の売店では「俵みくじ」があり、ダーツ darts のように投げ矢を「招き猫」に向かって投げ、柀に入れば大当たりとなる。「聖・俗・遊」が入り混じる独自の空間が現出している。

要するに、南蔵院の釈迦涅槃像は形式と内容にズレがある「異種混淆」の創造仏であり、仏教の様式をまといつつ、新たな崇拜対象を作り出したと言える。寺院側の説明では、釈迦涅槃像は「人間がだんだんと優しさを失い、自分だけの幸福を祈る姿から、生きとし生けるものに感謝しつつ生きることができる、皆様の『心のよりどころ』になれば、という願いから建立された」のだという。釈迦涅槃像は、外見上は仏教の装いを保ちつつも、実体は新たに創出された民間信仰の対象物であり、「心の拠り所とせよ」という現世肯定に満ちたメッセージが託されたのである。

建立後10年を経て、2005年10月16日には、釈迦涅槃像建立10周年記念法要が執行され、姉妹寺院の韓国釜山市慈悲寺のパク・サムジュン(朴三中, 박삼중 Pak, Samjung)住職²²⁾をはじめとする僧侶26人と韓国の信者400人を含む3000人が参列した。仏教の国際交流を通して、日韓の友好親善を深める試みであった。法要の後、日本に韓流ブームを巻き起こした映画『冬のソナタ』(2003年NHKBS-2, 2004年NHK総合で放送)で共演した韓国の人気映画俳優のベ・ヨンジュン(裴勇俊, 배용준, Bae Yongjoon)とチェ・ジウ(崔志宇, 최지우, Choi Jiwoo)の「釈迦涅槃像を通じて韓国と日本の人々の友情の輪が広がることを願っています」という祝辞が披露され、サイン入りの巨大な写真が飾られた²³⁾。この後で、参列者全員が涅槃像の台座の上に安置された檜製の大量珠(長さ7m, 重さ10kg)をくぐって健康を祈った。南蔵院の篠栗での初代住職であった林覚運は、筑豊炭坑で働いていた多くの朝鮮人を援助し救済したことで韓国では広く知られており、戦後も韓国とは特別の関係を築いてきたことが日韓友好のあかしとして生かされた。釈迦涅槃像の10周年記念にあたっては、長年にわたり弱者の味方で、国際交流にも強い関心を持ち続けてきた南蔵院の活動を表に出して、韓国との友好関係を効果的に演出したのである。このように釈迦涅槃像は、単なる崇拜対象としてだけでなく、集客装置や宣伝媒体として使用され、南蔵院自体を外部的に向けて発信する情報媒体となり、イベント寺院の象徴として定着することになった。

5. 納骨堂

納骨堂の釈迦殿は、「釈迦涅槃像」の建造と同時に建築に着手し、一般応募をかけて、納骨壇の契約を開始した。釈迦涅槃像の完成(1995年)後に、仏像の背後と地下にある釈迦殿(1992年)と月華殿(1993年)の納骨壇はほぼ契約済みとなり、更に本堂側の参道沿いの土地に、慈悲殿(平成12年(2000)

12月2日)と尊^{そんりょうどう}霊堂(平成14年(2002)12月12日。本堂納骨堂)を建てた。新しい二つの納骨堂は豪華な造りで値段も高いが、多くの遺骨を収容できる。尊霊堂はエレベーターをつけ二階建てにして地下を整備した。慈悲殿は2・3階部分を納骨堂にして、1階は父母感謝堂になっていて、釈迦の両親を祀っている。

納骨壇の契約は、全て永代供養料として納める方式で、2005年の南蔵院のパンフレットによれば値段は以下の通りであった。①釈迦殿。1~2霊用(高さ25×幅26×奥行37cm)70万円と50万円(8段の最下段と最上段)。特別納骨室の阿弥陀堂(3階)の場合は1霊で20万円²⁴⁾。合計6000壇。本尊は阿弥陀如来。②月華殿。1~6霊用(23×40×50)80万円。合計4000壇。本尊は月光菩薩。涅槃像の原型を安置。③慈悲殿。1~8霊用(40×40×45)135万円と1~6霊用(5段の最下段と最上段)95万円。合計3000壇。④尊霊堂I型。1~12霊用(212×42×45)380万円、II型。1~9霊用(78×42×48)160万円。合計500壇。以上のうち、釈迦殿と月華殿は全て契約済みである(阿弥陀堂の一部を除く)。納骨壇数は4つの納骨堂を併せて、総計で13,500、2004年現在では9900壇が契約済みで、約三分の一の3000壇には骨壺に遺骨が納められていた。宗派や信仰は多様で、浄土真宗4675、禅宗1044、浄土宗929、真言宗848、日蓮宗334、天台宗53、法華宗23、神道115、天理教10、キリスト教9、創価学会6、金光教5、霊友会1(総計8052。届出があるもののみ)であった。生前契約で1ヶ月以内に永代供養料を払い込む(図3)。

お骨を納める時の開眼供養と納骨供養は3万円、年忌供養は2万円で行う。宗派を問わず受け入れ、永代供養料のみを支払うだけで、管理費や維持費がいらぬという方式は好評で、契約者は九州に多くほぼ全体の六割から七割を占める。それ以外では、東京、大阪、千葉、山口などで、北海道は少ないという。生前の契約が主体だが、本人が亡くなってから遺族が遺骨を納めたいと希望者してくる場合もある。最も若い年齢では40代の人がある。申込者は地元の人少なく、外部が大半で、子供のない人、独身者、子供に迷惑を掛けたくない人が多い。口コミや紹介など「ご縁」があってくるが、九州の場合には新聞広告を見てくる人が多い。申込はホームページを使用せず、直接に連絡するようにしている。

納骨壇は極楽浄土を表わす情景をUVセラミック蒔絵仕上げの塗りで現出しており、基本的には真言宗の形式だが、購入者の宗派は問わない。尊霊堂内の納骨壇のデザインは阿弥陀堂仏具店に作成を依頼し、漆塗で手書きの図案を描く。表面の花柄は浄土に咲く蓮の花を基本に、春夏秋冬を表わし、桜、百合、紅葉、桐、あるいは杜若^{かきつばた}や竹などが描かれる。上段に極楽に飛び交う鳳凰、下段に咲き誇る牡丹の図柄である。最も早く作った釈迦殿は本尊を阿弥陀如来とし、納骨壇は、上段に鳳凰、下段に桐を描いたもの、上段に波、下段に山を描いたものがある。月華殿は高野山から灯を分けていただいて、本尊を月光菩薩とし、涅槃像が安置してある。野外にできた「釈迦涅槃像」の原型である(山高龍雲作)。納骨壇の色は紺色と藤色を基調として図柄はツタの文様を描く。納骨壇の番号は、40番台と90番台は欠番で、4番と9番も「死」「苦」を表わすとして設定していない。壇の中は骨壺と位牌を納めてある。室内には常時お経を流しているが、宗派は様々なので、1日1宗派と決めて、般若心経、南無大師遍照金剛、南無阿弥陀仏と変わる。以前は鳥の声やモーツァルト W. A. Mozart のレクイエム(requiem 鎮魂曲)も入れたことがあるが、現在は行っていない。午前9時から午後5時まで開いており、持参の鍵を持って自由に入れる。遺族の方々が、骨壺の前で話をしている光景もあった。息子を若くして亡くした母親がいて真剣に祈っていることもある。納骨堂を作ったことで、南蔵院への参拝者は激増し、境内は一層の賑わいを見せるようになり、供養ビジネスとして成功を収めている。

納骨堂の長所は、寺院側の説明では、①年間の維持費や管理費などは一切かからない(子孫に対して



図3 南蔵院の納骨堂（提供者：中山和久）

経済的負担をかけない）、②継承者の有無にかかわらず契約できる（祭祀継承者がいなくても受け入れる）、③宗派や宗旨は一切問わない（納骨壇の契約後に宗派を変える必要はなく、檀家としての寄付・奉仕などの義務はない）という三点があげられている。いずれも従来の墓地や納骨堂では難しいとされてきた条件を克服し、子孫などに負担がかからないようにする。最近では、団塊の世代の人が篠栗霊場の廻路に來たり、納骨堂に関心を持って見に来ることも多いという。遺骨を重視する民間の習俗を踏まえて、現代の状況に巧みに適応した寺院の生き残り経営戦略を展開している。

6. 死者供養

納骨堂とは別に、死者供養と追善供養の全てを南蔵院が責任をもって執り行う方式もある。「南蔵院法友会」といい、本人が生前に入会していれば、亡くなった後の葬儀や追善供養について、供養料（お布施）を支払う必要はない。亡くなると、南蔵院の僧侶が枕経・通夜・葬儀を執行し、戒名を授ける。葬儀会場も生前に指定しておくことが出来る。追善供養は、初七日、四十九日、初盆供養、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、三十三回忌、五十回忌の全てを、本堂か納骨堂の供養室で行い、毎年の春秋の彼岸供養50年間と、盆供養（初盆供養を除く）は、本堂で合同法要の形式で行う。主たる入会希望者は、家族がいないので自分の葬儀について心配している人、死後に子供たちに負担をかけ

たくなっている人である。「法友会」の趣旨は、パンフレットによれば「心のよりどころ」として建立された釈迦涅槃像のもとに集い、「一度限りの人生をいかに心豊かに生きるかを考えると共に、死後の一切の不安解消のため、南蔵院が葬儀・追善供養などにおいて、『会員様の心の安らぎを得る』ことを目的とする」という。ただし、宗派としては真言宗になり、それ以外の選択はない。支払は一括で120万円が基本である。ただし、葬式や追善供養の会葬者が多いことが予想される場合、葬儀や供養のお返しの品を豪華にしたり、祭壇を立派にしたいという希望がある場合には、150万円や200万円のコースもある。一括払いが難しい場合は、本人に団体生命保険や死亡保険に入ってもらい、保険金の受取人を南蔵院として、月々納めていく方法もとれる。この方式は、某生命保険会社と提携して平成9年(1997)に開始した。ただし、本人の健康状態によっては、保険加入を拒否される場合もあり、その時は一括払い以外に方法はない。基本的には永代供養で五十回忌までを寺院が確実に執り行う方式で、南蔵院が続く限りは継続するという意味合いもある。法友会の加入者は400名ほどだという。

平成17年(2005)から墓地も建設して、販売を開始した。一つは「永代供養墓」で、従来の納骨形式の墓で、永代供養料と永代使用料を合わせて350万円(累代墓、夫婦墓、個人墓などで33基限定)で²⁵⁾、その場所を「十善墓所」と名付けた。もう一つは「自然合祀墓」といい、釈迦涅槃像の隣に建立した「合祀供養塔」に納骨する。永代供養料は15万円である。主に家族の身寄りのない人を対象とする。合祀霊台帳に名前(俗名・戒名)を記して供養塔内に安置し、観音像を作って名前を刻み、涅槃像台座内部の「四国霊場八十八ヶ所お砂踏み」回廊に祀る。供養塔は涅槃像の後ろに位置しているので、沢山の参拝者に手を合わせてもらえる。いずれも年間維持費や管理費は無料で宗派は問わない。南蔵院は、既に平成7年(1995)8月19日付けで「釈迦涅槃像の完成」の広告を出した時に、同時に「自然合祀墓のご案内」を掲載して、「お墓もいらない、納骨堂にも入りたくない。自分の遺骨は自然(大地)に帰してほしいと思っておられる方。また、おまつりしてくれる人がなくて困っておられる方。大地に帰り、花や木に生まれ変わりたい。そういう方々の自然合祀墓を計画しております。」と説き、新しい仏像と納骨堂の建造と同時に、別の方式も試みようとしていた。ほぼ10年後に本格的に取り組んだことになる。当時の広告では「遺骨は自然に帰してほしい。また、後継ぎがないことなどで、後々おまつりしてくれる人がいなくてお困りの方や、遠くの故郷にお墓があって、その処理にお悩みの方…。そういう方々のお手伝いを実現し、また安心していただきたいというのが、自然合祀墓の趣旨です。」と説明している。少子化・高齢化が進み、檀家寺と信者との繋がりが弱まりつつある時代への積極的な取り組みであると言える。住職と2009年に会った時には、自然葬にも取り組み始め、信者さんの要望で夏になると博多湾で散骨を行っているという話が出た。将来的には境内で樹木葬も行いたいと考えている。篠栗町が2009年3月に国から「森林セラピー基地」の認定を受けたので、それとの接合も意図しているようだ。

ペット供養は釈迦殿が出来た平成4年(1992)に始まった。永代供養料は3万円である。釈迦涅槃像の後方に「愛玩動物供養塔」を建立し、動物名と施主名を刻んだ銅版の永代供養札が塔の入り口にある。1990年代になって「ペットは家族です」という人が急速に増加し、死後の供養を望む信者の要望に応えたのだという。内容は、犬、猫、兎、亀、鳥などで、骨を三年間、骨壺に入れて預かる形式で、その後には合祀する。その間に引き取りにくる人もいる。人間の遺骨を入れる納骨堂には、動物の骨を納めることはない。ペットは飼い主には愛着があっても、他の人にとっては単なる動物に過ぎないからであるという。

南蔵院は1990年代に入って死者供養や先祖供養を幅広く展開したが、それ以前にも小規模に行われていた。林覚乗の話では、南蔵院には、昭和28年（1953）頃に建てた四角形で狭い形の「納骨堂」が旧本堂の上にあって、林覚運の時代からの七戸の檀家の納骨を受け入れていた²⁶⁾。昭和58-59年（1983-1984）に本堂を上にあげて、跡地に大師堂を作った時に、古い納骨堂を新しくして大師堂の後ろに新たに作り、それ以後は少数の檀家からの申し出に応じて納骨堂に入れることもあった。「本堂の近くで拝んでもらいたい」という願いが込められていたという。平成元年（1989）には永代供養（五十回忌まで）を開始した。平成14年に尊霊堂が出来た時、古い檀家の分はここに移した。現在の檀家の総数は20戸になっていて、2004年の葬式・法事は47戸であったという。堂内には、十三仏と歴代住職（覚運と覚雅）の位牌を祀っている。林覚運の石像は尊霊堂の上の大岩の上にあって本堂を見守り（昭和22年10月25日建造）、林覚雅の石像は釈迦涅槃像前の広場にある。

南蔵院は祈禱寺として活動してきたが、死者供養を完全に排除していたわけではなく、底流としては継続してきた。しかし、林覚乗は時流を読んで、釈迦涅槃像を象徴的な他界の風景として登場させ、本格的かつ大胆に納骨堂を中心とした総合的な死者供養に関わる商業活動を展開し、供養葬儀ビジネスの一画に参入した。その背景には、新四国八十八ヶ所霊場を擁し、田畑や森や林の各所に札所が点在して、神と仏が無数に祀られている篠栗の風土があった。釈迦涅槃像は、現在では札所第1番にふさわしい礼拝所として、篠栗霊場の中に風景として自然に溶け込んでいる。

篠栗の霊場のうち寺院形式の札所は、基本的には祈禱寺で特定の信者寺として機能してきた。しかし、札所の幾つかの寺は、祈禱だけでは十分に生活が出来ないと考えると、納骨堂を作り、霊園や墓地を創設して、信者の先祖供養やお盆の施餓鬼供養を行うなど死者供養を取り込むようになった。内容も、先祖や親族の供養だけでなく、戦没者や被爆者の供養、水子供養など幅広く展開している。篠栗霊場の札所では、南蔵院（第1番）、遍照院（第62番）、一ノ滝寺（第40番）、大日寺（第28番）がこの事例で、札所ではないが若杉山で「養老の滝」として知られる明王院は、近年は施餓鬼や死者供養を頻繁に行っている。少子化や高齢化に伴い、檀家寺に恒久的な墓を持っていても、将来は無縁になる危険性を察知した人々は、急速に霊園や納骨堂の活用を考えるようになってきた。南蔵院はその傾向をいち早く感知して積極的に事業に取り組んだ。ただし、南蔵院の納骨堂は篠栗の地元ではなく遠方の人々が購入することが多いという。篠栗に檀家寺があり、家墓を持っている場合は、南蔵院に頼むことには抵抗がある。また、篠栗では戦後に各地区（大字）ごとに納骨堂が建てられている場合が多く、盆の先祖供養や施餓鬼は合同で行って、地域社会の共同性を再確認する機会として機能している。また、檀家寺も納骨堂を持っている場合が多く、家墓から移行する時には、馴染みの深い寺院に頼むのが通例である。

一方、近年の傾向として、篠栗には多くの霊園が作られ、葬儀ビジネスの実験場のようになり、既存寺院との摩擦も起こってきている。津波黒の人工湖の脇にある安楽寺篠栗霊園²⁷⁾と篠栗極楽霊園、郷の原にある聖徳廟（洗心山聖徳寺）、第40番札所の一ノ滝寺の霊園などである。いずれも宗派を問わずに受け入れている。安楽寺篠栗霊園は、「緑に包まれた湖畔のメモリアル・パーク」というキャッチフレーズで宣伝しているが、その名の通り「公園」イメージが横溢している。篠栗は、福岡市内からJRの快速で20分余りで到達するというアクセスのよさ、森に包まれた山々と各地に点在する野の神仏と札所という独自の雰囲気、そして丘の上に立つと福岡市内を遙かに展望できるという立地など、生前に自己の墓所を求めようとする人々にとって、絶好の環境であると言える。

7. 宝くじとパワースポット、そして「南蔵院グッズ」

現代の南蔵院は「宝くじのお寺」として名高い。1億円の宝くじに当たったので、林覚乗は、「ラッキーな住職」「宝くじ住職」と呼ばれている。1995年6月に福岡ユニバーシアード協賛ジャンボ宝くじで1等、前後賞合わせて1億3000万円に当選し²⁸⁾、その10日後にはナンバーくじで560万円を当てた。同年5月に完成したばかりの釈迦涅槃像のご利益であるとしてマスコミで話題になった。宝くじで当てたお金の多くは福祉団体に寄付したという。現在では「宝くじがあたるパワースポット」として人気を集め、テレビなどでも紹介される機会が増えてきている²⁹⁾。釈迦涅槃像の背中に貼られた御札には、「宝くじに当たりますように」という願い事が書いてあるのが多い。林住職は、ジャンボ宝くじ発売のたびに、福岡駅前のみずほ銀行売店で購入していて、それを分けてもらった参拝客のうち、3人が1等に当選しているという伝説もある。住職は「当たっても、絶対に独り占めにしないこと。一割は寄附をする心を持つ人に、仏さまはご慈悲を与えてくれます」と述べている。南蔵院の戦略は現世利益の信仰を現代風に翻案して民衆の心に訴えることであり、キーワードは常に「心のやすらぎ」であった。

南蔵院は現代の若者にはパワースポットとして人気を集めるようになった。この言葉が流行し始めたのは、平成18年(2006)頃からであり、特に女性たちの間で、癒しや浄化、気のチャージ、縁結びなどの開運を求める場所として各地の神社が紹介され[菅2010: 243]、寺院や聖地、自然全体へと広まってきた。また、2007年頃からスピリチュアリティの仕掛け人の一人である江原啓之が、ブログなどで、新しい力やエネルギーが得られる場所としてパワースポット(エネルギーの強い場所)やスピリチュアルスポット(聖域)という用語を多用し始めて、具体的な場所を例示したことの影響も大きい。現代の不安や不確実さの中で、頼りになるものが失われているが、さりとて宗教や信仰という用語に抵抗感のある若者たちに、軽やかなインスピレーションとイメージを掻き立てる「パワースポット」³⁰⁾ブームがおとずれているのである。

南蔵院には、多くの参拝者が買っていく二つの人気パワーグッズがある。一つは俗称「宝くじのお札」と呼ばれる大黒天の御札で、その由来は住職が宝くじとこの御札を一緒にして仕舞っていたら当たったと言われ、宝くじを買った後に一緒に包むとよいと言われる。実際に御札を購入した何人かが宝くじにあたってお札にきているという。もう一つは、御数珠で、2001年にパリーグの覇者になった近鉄バッファローズ(2005年3月解散)の梨田昌孝監督をはじめ、選手たちが優勝を祈願して願いが叶った数珠(念珠)で、材質は落雷があった杉の木である。1985年に境内の大杉に落雷して、皮がはげ落ちて生木になった。この木は「天の神様が落ちた」御神木で、「霹靂木」といい霊力が宿るとされて、仏師の山高龍雲やまたかりりゅうんに依頼して大杉に雷神を刻んでもらった。この御神木から作った「御神木腕念珠」うでねんじゆ(1000円)はスポーツ選手が身に着けると幸運が授かるとされる。大黒天の御札と霹靂木の数珠はいずれも「南蔵院グッズ」とでも言うべきもので、伝統と近代が混然一体となって生み出す不思議な力の源泉となって売れている。また、釈迦涅槃像内の「仲見世」の売店では、内部限定で「金運大黒天お守り」と「金運仏足お守り」を販売しており、「金運仏足お守り」にはスクラッチカードが付いていて、小金があたるようになっている。さらに宝くじ当選の時に記念に作った「合掌猫」がっしょうねこ(2500円)も金運に恵まれるお守りとして人気がある。宝くじに始まる一連の出来事を利用した巧みな商売が展開している。パワーという抽象的な概念、漠然たる目に見えない力は、人々の欲望を刺激してやまないのである。

釈迦涅槃像が作られて以来、南蔵院への参拝者は急増した。これに対処するために、近くのJR城戸

駅の改造計画が立てられ、南蔵院が多額の資金を投入して、整備工事を行い、平成12年（2000）に神社仏閣を合わせたような和風の駅舎に改築された。平成15年（2003）3月15日、JRのダイヤ改正で城戸の駅名が「城戸南蔵院前」になり、南蔵院が駅の管理委託を引き受けている。住職によれば、駅名変更は、乗車券の自動販売機などを含めて変えていく必要があり、1000万円ほどかかったという。駅舎内のトイレを綺麗にし、独自の雰囲気を持つ土産物屋を作った。売店では、「南蔵院グッズ」の数々が売られている。住職の法話や講演集の本、カセット、CD、ビデオ、DVD、お線香、御数珠、お守り、自然野菜、御菓子などが置いてあり、商売は巧みである。御菓子には「仏足せんべい」「千僧万願」など釈迦涅槃像に因む新商品もある。元々の国鉄城戸駅は1968年の開業で、篠栗線の桂川―篠栗間の開通に伴って設置され、これによって篠栗霊場は第1番札所の南蔵院から打ち始める人が増えたという。その後、経営は国鉄からJR九州に変わり、開業から32年を経て新しい駅舎に生まれ変わって、大きな変貌を遂げた。現在は、完全に南蔵院の「門前駅」になり、快速も停車して、JR博多駅から20分で着く。JR博多駅の篠栗線のプラットフォームには、南蔵院の年中行事表やポスターが張り出されている。南蔵院は、老若男女を問わず、都市の人々の現世利益に応える「郊外寺院」の性格を強めている。

8. 創られた聖地

南蔵院の境内には、生い茂る杉や竹の間に、本堂や大師堂、小祠や小堂が点在し、道沿いには石仏や神像などが点在して、独自の宗教性を持つ雰囲気を醸成させている。南蔵院本堂は札所第1番（正式名は釈迦如来堂）であるが、境内には第3番釈迦如来堂（城戸釈迦堂）、第31番文殊菩薩堂（城戸文殊堂）、第45番不動明王堂（城戸滝不動堂）、第60番大日如来堂（神変寺）、第71番千手観音堂（城戸千手堂）の5ヶ所の札所が点在する複合的な霊場である。空間の演出は、釈迦涅槃像の建造で極点に達したが、境内各所に周到に拝所が配置されている。頻繁に周囲の環境を整え、配置変えをして、風景を作り変えているのが南蔵院の大きな特徴である。

JR篠栗駅を降りると、駅校舎の中に南蔵院グッズの売店があって境内の一面に入ったかのようなのである。多々良川にかかる城戸橋を渡る。橋の手すりには鉄琴の音板が取り付けられていて、叩くと「ふるさと」と「メダカの学校」のメロディーが流れ、別称をメロディー橋という。鉄琴を叩けば童心に帰って別の世界に導かれる心地がする。国道201号線に突き当たり右に折れると、南蔵院の山門があり、参道から境内に入る。春の桜の咲く頃は見事な景観である。参道には土産物屋や食堂が並んでいて、至る所に神仏の祠があり、森と滝と川を背景として、稲荷、地藏、観音、十三仏、羅漢など民衆になじみのある身近な神仏が自然の中に溶け込んで鎮座している。右手の斜面の上に懸崖作りの本堂があり、内陣中央には南蔵院の本尊の阿弥陀如来、脇に第1番札所本尊の釈迦如来が祀られている（本四国第1番霊山寺と同じ）。2010年には回廊が出来て、釈迦涅槃像に直接向かう階段も綺麗に整備された。大師堂は山寄りであり、弘法大師空海を祀る。秘鍵大師像で、大きな金剛杵が前に置かれていて、紐の先が大師像とつながっている。大師堂から谷を奥に進むと、広場に出て中央には高さ11mでコンクリートにペンキ塗りの巨大な不動明王像が建っている。昭和36年（1961）10月の建造で、柴燈護摩は奉安後にこの前で行われるようになり、災厄を祓う効果があるとされる（第39番延命寺の影響ともいう）。釈迦涅槃像が出来るまでは、ここが境内の中心で、現在もイベント会場の雰囲気が残る。

西側には荒神堂、その奥に鶏魂牛馬供養塔がたつ。鶏魂供養を行う所である。巨大な招き猫や水掛け地藏などが配置され、不動の左脇に五百羅漢があるが未完成である。沢沿いに奥に上がっていくと行

場の不動の滝があり、上部には壇ノ浦で負けた平家の落人がいたという伝説の平家岩³¹⁾がある。篠栗霊場の開創者とされる慈忍は、不動の滝で修行したとされ、滝行は現在でも病氣治しに効果があるという。滝の脇にある不動堂は南蔵院の奥之院であると共に第45番札所である。下手の不動霊水窟には、洞窟の中央に不動と巨大な五鈷杵が祀られて、湧水を飲んでご利益にあずかる。不動の滝の周辺がこの地に霊場を形成させた原点であろう。奥之院とは単なる地形上の意味ではなく、精神的にも根源である。

釈迦涅槃像へは、わらべ地蔵の脇から東へ向かう七福神トンネルを潜り抜けていく。わらべ地蔵は国廣秀峯作の創作で³²⁾、あくび、居眠り、合掌、聞き耳などその仕草が親しみやすく南蔵院のマスコットのような存在である。横に小林一茶作の俳句「たけのこの番してござる地蔵かな」「見物に地蔵も並ぶおどり哉」が添えられている。トンネルの内部中央には七福神が祀られ、右に慈母観世音菩薩、左に白衣観世音菩薩が奉納され、白衣観音は看護婦に見立てられている。慈母観音は福岡市博多区の信者が交通事故から奇跡的に逃れた御礼として奉納した。左右の壁には参拝者の名前の板がびっしりとほめこまれている。トンネルは、胎内潜りになぞらえた死と再生の演出のようである。トンネルを出た広場には、札所第71番の城戸千手観音堂（豊栄館の管理）があったが、南蔵院が周囲の土地を買い取って整備し、2009年に札所は下に移り、跡地に休憩所が出来ている。山側には妙見堂と大黒堂があり、南天稲荷が2007年7月26日に祀られた。南天は「難を転ずる」という厄除けの効果があるという。杉木立の参道の坂道を上ると左手に毘沙門天堂（2010年荒神堂の上方から移転）があり、少し行くと修験道の開祖とされる役行者像えんぎょうじやうの脇を通って台地上の広場に出れば、雄大な釈迦涅槃像の正面に到達する。

古い境内地が谷間にあるのに対して、涅槃像は台地の上であって一挙に展望が開け、閉鎖空間から開放空間へと蘇る心地がする。台地の上には、鯖大師と魚霊観音が祀られ、豊漁と商売繁盛が願われる（元々は不動明王の広場の脇にあった）。台座の中には四国八十八ヶ所霊場の札所から砂を集めた「お砂踏み」が出来るミニ四国霊場があり、胎内にはミャンマーから寄贈された「仏舎利」が納められている黄金の舎利殿があって、御札料を納めるとお参りできてご利益にあずかれる。途中の壁にはペ・ヨンジュンとチェ・ジウが寄贈した「南蔵院の釈迦涅槃像の建立10周年おめでとうございます」という祝辞のサイン入り写真が飾られている。神聖と世俗、生と死、神と仏、ありとあらゆるものが共存し同居する不思議な空間である。

南蔵院の参詣者は、2004年の統計では年間120万人、月平均10万人、一日3000人で、約七割が福岡県、約三割が佐賀・熊本・山口などという。観光地としても人気があり、最近では韓国人の訪問客が多く、年間5万人に達するとされる。韓国人の増加の原因は、戯曲の『八木山峠』が韓国で翻訳され、福岡にいた韓国駐日大使が読んで感動し、南蔵院へ参拝したことがきっかけとなった。現在では、大宰府・南蔵院・黒川温泉をセットにしたルートがあって、韓国の旅行社にはパンフレットが置いてある。

観光客が増加した理由は、ビデオを観光バスの中で流している効果が大きく、口コミで来る人も多いという。境内の各所に祀られている、弘法大師、稲荷、観音、地蔵、不動、荒神、大黒天、七福神、妙見などは民間信仰の神仏である。祈願する場所を多く作れば、一円玉を一つずつ置いていくのでかなりの金額になる。ちなみに南蔵院は、一円玉のお賽銭の上がり方が日本で最も多い寺であるという。信仰心を刺激してやまない神仏の空間は、実は金儲けの場でもある。

南蔵院の境内は、人工的に創られた聖地で、キッチュ kitsch（低俗、俗悪、悪趣味³³⁾）でもあり、神仏との出会いが楽しみを産むアミューズメントパークの雰囲気もある。各所に、手摺り、スロープ、休

憩所、ベンチ、エレベーターがあり、車椅子の方やお年寄りでも参詣できるようにバリアフリーを心がけている。荒神茶屋やおやすみ茶屋があり、お茶の接待が受けられる。頻繁に神仏や堂社の配置換えを行い、演出の効果を計算した創られた聖地になっている。まるで商品展示のレイアウトを変えるように、いとも簡単に神仏や小堂を移動してしまう。しかし、異界との接点が境内に多数配置されると、創られた聖地であっても、独特の信仰の場が形成され、歳月を重ねると、次第に周囲の風景と調和するようになる。境内を川が流れ、奥に滝があること、究極の「奥」の意識が人々の場所への感覚を落ち着かせて伝統の古さを幻想させる。事実、そこには篠栗霊場の開創者であった慈忍の修行場であったという伝説が伝わっている。桜の花散る頃や紅葉などには、多くの参詣者や観光客が訪れるようになり、南蔵院の戦略は成功を収めている。自然を積極的に取り込んで聖地を構成し、配置換えを巧みに行って、個々の場所にまつわる審美的価値を更新し高めていくという動態性が、繰り返し訪れる誘因を生み出しているのである。

9. 年中行事

境内の流動的な整備と年中行事の多さは南蔵院の特徴である。年中行事は、一年間を通して均等に、頻繁に行われ、真言宗寺院での通常の行事と共に、独自に作り出した人集めのイベントの様相を持つ行事もある。平成23年（2011）の行事は表1の通りであった。

年中行事の特徴として以下の点をあげることができよう。

- ① 真言宗寺院の毎月の行事。毎日のお勤めは毎朝6時30分から行われ、毎月の行事は護摩供養（第1日曜日）と三宝荒神祭（28日）である。護摩供養の参加者は150-200人で、供養がある人と誕生日を迎える人に、席が分かれる。供養は30分で、住職の法話があり、お弁当の「接待」が行われる。バックや腕念珠などがあたる籤が行われる。三宝荒神祭の参加者は30人から50人で、^{ひやくまんべん}百万遍（^{じゅうずく}数珠繰り）が行われる。供養の後に、副住職の法話があり、仏教講座や写経会（2004年開始）が行われる。「接待」はない。
- ② 真言宗寺院の年中行事。修正会、初護摩、花祭り（お釈迦様誕生祭）、弘法大師百味供養、弘法大師誕生祭、法灯会、施餓鬼供養（千体地藏流し）³⁴⁾、大釈迦仏御身拭い（2000年代に開始）³⁵⁾、納荒神、納不動などである。
- ③ 一般的に行われる年中行事。正月、七草粥、節分、春彼岸、盆供養、秋彼岸、大晦日（除夜）などである。七草粥には信者が沢山の山菜を持ち寄って振舞がある。
- ④ 日曜日に行く特定行事。節分祭（星祭）、水子特別供養、おさかな供養祭、鶏魂供養祭、わらべ地藏祭、仏壇供養は日曜日、めがね供養は祝日（体育の日）に行く³⁶⁾。月例の護摩供養や年間最大の大仏不動尊大祭（柴燈護摩）は日曜日に行われる。企業や団体と結びついたり、近年の流行と関連する行事が多い。
- ⑤ 篠栗巡礼に関わる行事。正月の寒行に合わせ南蔵院主宰の篠栗霊場巡拝（1月8～10日）が行われ、参加自由、弁当持参であるが、人気を集めている。霊場会が主催する霊場開き（3月第一土曜）とは別に南蔵院が独自に行う。
- ⑥ 特別な祈禱や活動。随時の治病祈禱、滝行などがある。写経会は2004年に開始し、当初の3人から30人になっている。北九州が多く、長崎から来る人もいる。仏像彫刻会は毎週第二金曜日に山高龍雲³⁷⁾の指導で、午前11時から午後4時まで行われている。

表1 年中行事予定表 (2011)

月	日	行事	時間その他
毎月	第1日曜日	護摩供養	10時30分。納骨堂の参詣者は多い。
毎月	21日	弘法市	弘法大師の供養。
毎月	27日	三宝荒神祭	10時30分。百万遍(数珠繰り)。
1月	1日	修正会護摩祈祷	0時
	3日	本尊初護摩祈祷	10時30分
	7日	新春七草粥会	11時。信者が沢山の山菜を摘んで来る。
	8日～14日	寒行護摩祈祷	毎日7時
	8日～10日	篠栗霊場巡拝	9時本堂前出発。自由参加。弁当持参。
	27日	初 荒 神	10時30分。筑前琵琶演奏(鞍手郡実相寺)
2月	6日(2月第一日曜)	節分祭(星祭)。	10時30分。3000人。2月3日を第一日曜へ。
3月	18日～24日	彼岸供養	お中日のみ10時30分より護摩供養
4月	3日(第一日曜)	水子供養	11時。水子特別供養祭ともいう。
	8日	花祭り(お釈迦様誕生祭)	11時。誕生仏に甘茶かけ。
	15日～21日	百味供養	毎日7時
5月	8日(5月第二日曜)	おさかな供養祭	11時。鯖大師と魚霊観音の例祭。始まりは鯖大師祭で5月5日。移行して名称を変更。
	15日(5月第三日曜)	鶏魂供養祭(食肉供養)	11時30分。雉4羽を放つ。まんじゅうの接待。
6月	5日(6月第一日曜)	わらべ地藏祭	11時。まんじゅうの接待。
7月	15日(旧暦6月15日)	弘法大師誕生祭	10時30分。本堂で法要。稚児大師に甘茶かけ。
8月	13日	法 灯 会	19時。涅槃像前広場。雨天時は月華殿前。
	13日～15日	盆 供 養	
	15日	施餓鬼供養・精霊流し	13時。不動滝で施餓鬼と千体地藏供養。15時30分に月華殿前で精霊流し。
9月	20日～26日	彼岸供養	お中日のみ10時30分より護摩供養
10月	10日(10月体育の日)	めがね供養祭	11時
	16日(10月第三日曜)	仏壇供養	11時30分。「お仏壇の長谷川」主催。
11月	13日(11月第二日曜)	大仏不動護摩供養	10時30分。不動明王の前で柴燈護摩と火渡り。
12月	26日	大釈迦仏御身拭い	11時。メディアで報道されることが多い
	27日	納 荒 神	10時30分
	28日	納 不 動	10時30分
	31日	除夜の鐘	23時50分

⑦ 寺院の年中行事とは別に、「お山参り」と称して、一年に一回、希望者をつのって、高野山に参拝ツアーに行って親睦を深める。その時に「水行」などの修行も行う。

⑧ 納骨堂の参詣者は定例行事に合わせて来る者も多い。

総じて年中行事をその変化に焦点を当ててみていくと幾つかの点を指摘できる。

①行事の内容は通常の真言宗寺院と同じで民衆の現世利益に応えることであったが、実質的には徐々に死者供養を取り込んできた。しかし、年中行事の変化としては現れていない。ただし、納骨堂が活動し始めると参拝者が南蔵院の行事がある日に合わせて訪れることが多く、結果的に参拝者数の増大につながった。一部では新しい死者供養も取り込み、お施餓鬼に千体地藏流しを始めるなど小さな変動は続いている。

②年中行事には日曜日の行事も多く、本来の縁日や祭りの日を変更した事例が目立ち、企業や団体との関連性が強い。1986年と2011年の定例行事を比較すると、いずみ観音祭、めがね供養、仏壇供養が新たに加わり、企業関係の行事が増加している。おさかな供養祭は福岡と長崎の漁協組合（1983年開始）、めがね供養はメガネ組合、仏壇供養は仏壇店の長谷川（1999年開始）、鶏魂供養は食肉業者の粕屋食肉組合（2004年開始）のそれぞれが主催する。信仰よりも参拝者が多く集まることを重視するイベントの様相がある。

③年中行事のうち、特に賑わいを見せるのは、節分祭（星祭）とおさかな供養で、ものをもらえるイベントである。星祭の特別護摩供養の後、参詣者には籤引きで豪華商品が当るので3000人以上が集まる。1980年頃までは八割が団体であったが、現在は個人が大半で団体は一割程度になったという。豪華景品は2007年は液晶テレビ1本、湯布院温泉ペア宿泊券（3本）、デジタルカメラ（5本）、デジタルプレイヤー（5本）などであった。一方、おさかな供養祭は、1983年に鯖大師祭として始まった。1973年に鯖大師像を福岡鮮魚市場が、1985年に魚霊観音を福岡漁業協同組合が寄進して、豊漁祈願や漁民の守護として信仰を集めるようになった。福岡漁業協同組合主催の行事で、当日は大漁幟が立ち、水産会社や魚市場など魚関係の商売人が参加し、魚介類の供養、漁民の大漁祈願をする。当日は法要の後に、鯖を一人3匹を無料で配るので人気がある。2007年は参加者350人で、縁起物の塩鯖4300匹を接待として配った³⁸⁾。巡礼に伴う「接待」の慣行が生かされている。

④わらべ地藏、鯖大師、魚霊観音、いずみ観音など、仏菩薩を擬人化・擬動物化して、身近なものに変えて新たな崇拜対象にしているものが目立つ。白衣観音は看護婦に見立てられていた。特にわらべ地藏は人気があるが、完全な創作で、石仏師・国廣秀峯の作品であり、昭和61（1986）年までには南蔵院に納入したという³⁹⁾。あくび、居眠り、合掌、聞き耳などの可愛い仕草で人気があり、現在は南蔵院を代表する仏像として、ロゴマークのように使用されている。南蔵院で目立つのは地藏の多様性である⁴⁰⁾。七福神地藏、十二支地藏、明星地藏（若者の安全と幸福を祈願）、七福神わらべ地藏（海上安全と大漁祈願）、おかかえ地藏⁴¹⁾があり、創作を許容し、擬人化する流動性や融通無碍さによって、祈願の対象としてだけでなく、楽しませる仏像を多く生み出した。

⑤地域との関わりでは、篠栗霊場を巡拝する寒行があり、南蔵院が主催である。基本的に徒歩で行う。2006年に全行程徒歩の「歩き遍路」に変えた。近年の四国遍路での「歩き遍路」増加などのブームを睨んで、「歩く」ことに焦点を据え、修行を主体とする行に作り変えたと推定される。参加者は100名程度という。以前は遊び感覚の人が多く、道々でゴミを捨てる、タバコを吸うなどの行為があり、途中で受ける御接待の争奪をすることがあり、お礼に有難うございますと言わないなど問題があったが、修

行として行うことで変化した。ただし、落伍者はいるので、バスを南蔵院が雇って並行して走らせて、経費は南蔵院が負担するなど大きな援助をしている。2015年以後は参加者の高齢化のためバスによる遍路にする予定である。

⑥参詣者の数は、統計としては年間120万人とされる。しかし、統計は南蔵院の門の近くに設置してある統計メーターによるもので、付近の土産物屋や茶店の人々や、南蔵院に日々出入りする人も含んだ数値であてにはならない。実際には参詣者は減少してきており、様々な企画を立ち上げて「客寄せ」を考えている。

総じて、年中行事は、宗教性・修行性・娯楽性・遊興性を含む複雑な構成である。その多くにイベントの様相が見られ、沢山の参詣者を集めることを意図して、内容を巧みに作り上げている。篠栗での歴史がさほど古くはないにも関わらず古くからある寺院のような幻想を抱かせるのが南蔵院の特色である。篠栗町全体との連携も必要で、特に観光化には力を入れ、観光協会、旅館組合、土産組合、飲食組合、篠栗町商工会と協力関係を保っている。南蔵院の境内はいつも信者で溢れているように見えるのは、伝統性を重視しながらも、イベントを巧みに演出して活用し、地域の活性化と結びつける戦略の効用である。

10. 林覚乗のパフォーマンス

南蔵院を繰り返し訪れる人に聞いてみると、現住職の林覚乗の法話に魅了されて、何度も参詣にきたという人に出会うことが多い。現住職は個性溢れる性格で、巧みな法話で知られ、毎月の第一日曜の護摩供養の後で本堂で行われる法話には、多数の信者が詰め掛ける(図4)。大阪から毎月、聞きにくるという90歳の老婆もいる。住職は、地元だけでなく全国各地に講演に出かけ、「心ゆたかに生きる」をテーマに精力的に飛び回る日々をおくっている。講演は「現代の布教」なのだという。特に会社の入社式や研修会に呼ばれることが多く、期待と不安の入り混じる新入社員や、日々ストレスを抱える幹部などに対して、「感動する小話」を説教と織り交ぜて巧みに語る。信条は「出会う人に明るさを与えられ



図4 南蔵院本堂での法要 (提供者: 中山和久)

る人間でありたい」ということで、毎日の生活を明るく生き、夢を持つことで、人生を生きる意味と大切さを説く。常日頃の心の持ち方が大事だという。難しい言葉を使用せず、「しかし」を用いないことを心がけて、自信を持って話をする。パフォーマンスの巧みさが人々を引きつけ、寺院活動の核になっている⁴²⁾。

2009年に住職に伺った話では、講演は「釈迦涅槃像」を建造した1992年には年間300回を越えたが、現在では年間で多い時は250回程度という。活躍の状況は、月刊『ほとけの里通信』に掲載される「覚乗のきょうもどこかで」に紹介されている。健康の秘訣は一日5キロ歩くことで足腰を鍛える。ゴルフが好きで2008年には年間90回プレイした。最近の講演は、下関、秋田、金沢、沖永良部、鹿児島、大阪、岐阜、名古屋などへ行った。総じて名古屋が多いという。講演を依頼された企業は、デンソー、トヨタ、安川電機、建設業者、JR東日本などで、警察学校、看護学校、高等学校などの教育関係や、自衛隊や公団事務所でも行った。高校の校長先生からも、卒業式の祝辞などで依頼される。日航の国際線のパイロットやフライトアテンダント flight attendant、成田国際空港の売店の人たちなど航空関係者に講演する機会も多いという。苦情が多い中でも笑顔で対応するコツを説く。

住職と雑談風に会話をしていた時にも印象に残る話を聞いた。元読売巨人軍監督の川上哲治さんとゴルフをした時に、甲子園の高校野球で勝った学校の校歌を歌わずに、負けた学校の校歌を歌ったほうがよいのではないかという話になった。そうすれば決勝戦までに全ての学校の校歌をきくことができる。勝った学校はまだ試合ができるのだから、負けた学校をホームベースの上に立たせて、ベンチの前で拍手をして送ってやるのが、本当の強さで優しさではないかと思うと。負けた方の学校の校歌を歌わないのはよくない。勝ったチームのこゝだけをほめていてはよくない、常に相手の立場にたち、全体を考えて行動することが大切である⁴³⁾。当たり前だが誰も言いださなかったことをいうことが大事だという。別の野球の話で、キャッチャーNは、予選大会で、顔面にボールを受けて試合に参加できなくなってしまったが、最後にチームは優勝した。Nは優勝した日、たった一人でグラウンドに、優勝旗を持って出て行進していて泣き出してしまった。優勝は全ての人が力を合わせて達成できる、改めてそう思ったという。

法話は本として出版され、『いい人トーク集』（毎日コミュニケーションズ、1988、本体価格1300円）、『自分が好きですか』（西日本新聞社、1993、1000円）、『心ゆたかに生きる』（西日本新聞社、1997、1000円）、『しあわせを感じる喜び』（文芸社、2002、1100円）など廉価で出版されている。最近は、カセット（1000円）、CD（1500円）、DVD・ビデオ（3000円）などに力を入れて『心ゆたかに生きる』『であい』『おかげさま』『同行^{どうぎょう}二人』を出している。いずれも身近な話題を取り上げて、感動を呼ぶ話を伝え、心の持ちようで生き方を変えられることを説く。結果的に、南蔵院の宣伝になっているが、巧みな情報発信であるとも言える。平成3年（1991）1月から月刊で『ほとけの里通信』を発行して、南蔵院に関する最新のニュースを載せている（2011年6月で第251号）。毎回の年中行事には専属のカメラマンがいて取材し、写真を掲載する。最近のプロジェクトの構想は、自由に閲覧できる家系の図書館を作ることと、境内に緑を増やすことだという。

林覚乗は南蔵院を会社のように考え、信者や参詣者を「お客さん」と呼ぶ。納骨壇の購入者に対しても、檀家という言葉は使わない。寺院の運営はビジネスであり、商売だと割り切っていて考えている。経営者の才覚が要求されるが、コンサルタントは入れずに、独自に経営することが信条だという。

11. 地域と共に生きる

林覚乗は、2005年に、地元の病院経営者の三野原厚^{みの はらあつし}（医療法人浜江堂・三野原病院 第10世院長）⁴⁴と対談をして、お互いの信念や地元への想い、地域医療の在り方などについて語った[林・三野原2005: 46-61]。その中には南蔵院が篠栗という地域で生きることについての考え方が凝結して示されていた。幾つかの主題を整理してみた。

○地域とのかかわりを重視する

「南蔵院は、元々和歌山県の高野山にあった寺なんですけど、1999年（平成11）で篠栗に移って百周年だったんですよ。そこで、地域に恩返しをしようと思って救急車を一台、南部消防署に寄付したんです。消防署の方が〈南蔵院号〉と名付けたいというので、構いませんよといったら、一週間経ってから、今度は「病院に行く前に寺に行きそうな気がするから困る」って。でも名前は残したいというので、〈NANZOIN〉と書かれてあります。篠栗にも出動していますが、出動回数は今までで一万八千回とっていました。いまだに消防署長にも喜んでいただいでですね。やっぱり地域に認められなかったらダメですからね。」[林・三野原2005: 48]。

○僧侶は平等の精神を心がける

「父親は、…『お布施をいただいたら、封を切らずに家の者に渡せ』というだけ。冗談で言っているのかなと。なぜ大事かと聞いたら『お布施を開けて中身を確認していたら、多い人と少ない人が必ずいる。そうすると多い人ほどお経が長くなって、少ない人には手抜きをする。お布施で人を区別するようになるから、それだけは南蔵院の住職はしてはいけない。全部、平等に接しなさい』ということなんです。」[林・三野原2005: 49]。

○自分の仕事を天職として生きる

「母親にも立場や大事な役割があると思うんですけど、代々続いていく職業というのは、親父のうしろ姿、その一言ひとことが非常に重みがあると思います。」[林・三野原2005: 49]。「一つの道で一生懸命やっていれば、他人の批評って別に気になりませんよね。」「僕は、自分仕事が天職だと思えた時が悟りだと。そう思えない人に人生の喜びはないと思う。」[林・三野原2005: 54]。

○生きている人を救う仏教を目指す

「お釈迦様がインドの北部で説教して廻られたのは、生きている人を助けるためなんです。だから、死後のことを聞かれても分からないと答えておられるんですね。やっぱり、いま生きている人が救われないと本当の宗教ではないと思うんです。」[林・三野原2005: 50-51]。

○本尊よりも一般大衆に目を向ける

「〈行者 本尊に向かう時 本尊行者を守護せず〉という言葉があるんです。我々が仏様ばかり向いて拝んでいる時、仏様は我々を守ってくれないという意味なんです。逆に〈行者 衆生に向かう時〉＝一般大衆を救おうとする時、〈本尊 行者を守護する〉＝仏様は我々を守ってくれる。つまり目をどちらに向けるかですよ。涅槃像を作ったのもそうです。…僕ら本山から注意を受けるんです。本尊の方を向いていない異端児ですから（笑）」

○思い通りにならない世界を考える

「横須賀にあるコンピューターの研究所に講演で呼ばれたんですね。みんな有名大学の工学部とかを出た、日本の優秀な頭脳ばかり集まっているんですが、ノイローゼになる方が多いんです。入力を間違わ

なければ、必ずコンピュータが答えを出してくれる。ところが研究所を一步出ると、横に座った人間が嫌だと思って解決できないんです。そう思っても消すことができませんからね、ゲームと違って。そのジレンマがすごくて、自殺者が多いんだそうです。だから、 $1+1=2$ にならないような、思い通りにならない世界があることを教えてくれといわれまして。」[林・三野原 2005: 51]。

○お寺は心の病いを癒す

「昔から大きな温泉地には必ず真ん中にお寺があるんです。なぜかという、昼は温泉で身の病いを癒して、夜はお寺に集まってお説教を聞いて心の病を癒す、それが湯治場だったんですね。ホスピスも同じだと思う。」[林・三野原 2005: 53]。

○死後の世界への心の準備を心がける

「一人のお婆さんが『天涯孤独で身寄りがいいから、死んだ後に入るところがない』と。お寺の納骨堂は、身寄りがいいと預かってくれないんです。じゃあ、私が責任を持ってあなたを守るところを作るといったのが最初なんです。信者さんたちのお役に立ちたいという原点があるわけです。」[林・三野原 2005: 57]。

○お寺と病院がケアを共同する

「『子供がいないので、亡くなった後はすべて南蔵院さんにお任せします』という方が何人もおられるんです。法友会というんですけど、亡くなった知らせを病院でもどこでも出してくれたら、うちの職員が葬式の手配からあとのお世話までやる制度を作ったんです。この間、その中の一人が亡くなられて一カ月、発見されなかったんですね。そういうケアも、病院とお寺が一緒になって毎日どちらかが電話するとか、何か方法も考えなきゃいけないと思っているんですよ。」[林・三野原 2005: 51]。

○地域の環境を守る智慧を育む

「地域という観点では、いま篠栗の山を竹が侵食してきているでしょう。僕は、その竹を何かに利用できないかなって思っているんです。竹を切った跡に植林して水資源を守ろう、篠栗の山を僕らで守ろうと。お参りに来た人からも献木してもらって植えていこうかなと考えています。そうやって篠栗の歴史を守ろうと思っているんですよ。自然をうまく利用して遊歩道なんか作って、歩いた後は篠栗の無農薬野菜を食べてゆっくりして帰ると。」[林・三野原 2005: 59]。

○老人介護に取組み地域と共に生きる

「僕はアパートを建てたいんですよ。一人暮らしのお年寄りや信者さん用のアパートを作ってくれていう要望があるんです。うちは城戸駅付近に四千坪の土地があるので、その辺りに建てられたらなと。駅に隣接しているから、そのままホームだし、涅槃像も反対側に見えていつも拝めるし。買い物に行くのも、そのまま天神に行けるじゃないですか。…一階に診療所か病院があって、管理人として看護師の資格を持った女性とかがおられれば一番いいなと思っていて。…入居者には南蔵院の境内の掃除してもらってもいいんじゃないかと。同じことなんですよ。 (診療所と寺は) どこから見たかの違いだけで。お寺としても信者さんたちに喜んでもらえますからね。」[林・三野原 2005: 60-61]。

南蔵院は篠栗の有力寺院であるが、地元ではやや違和感を伴う寺院として受け入れられてきた。地元の人々は、寺院活動に垣間見られるビジネスの様相を敏感に感じ取るからであろう。しかし、南蔵院は積極的に新しい方策を考えだすことで、地元の経済の活性化に寄与してきた。南蔵院と地域社会は、宗教と経済の相補性と互酬性の中で生きている。

12. 霊場の中の南蔵院

南蔵院は、篠栗霊場全体の動きと常に連携して活動し浮沈を共にしていることはいままでもない。しかし、南蔵院は他の札所に比べて、圧倒的な力を持っているので、各札所との関係は微妙で複雑である。霊場の全体を統括して、札所の維持・運営にあたる組織は、正式名を「篠栗四国霊場会」といい、平成7年2月施行の規則によれば、事務所は南蔵院内に置かれていた。会員は各札所の守堂者と若杉奥之院の代表者で、南蔵院を本寺、各札所を末堂とする。会長1、副会長1、常任理事会1、理事9、事務局長1、監事2で構成され、理事は篠栗を11区に分けて、地区内の守堂者が互選で決定する。守堂者の権利や義務、継承・変更・移転・解任などは本会の決定によって承認されるが、継承の場合、後任者は本寺よりの囑託がないと決定されないため、南蔵院の力は大きい。札所には等級があり、特上級（札所1、南蔵院）、特1級（16）、特2級（25）、1等級（15）、2等級（12）であった。札所は朱印を押す時に納経料をもらう仕組みなので権利としては大きい⁴⁵⁾。霊場会に参加している各札所の45歳以下の者は青年部にあたる「法青会」^{ほうせいかい}、45才より上の壮年は「法徳会」として活動する。「法青会」（昭和63年発足）が活動の主役で、篠栗霊場の維持・保全、遍路道や道標の整備、真言宗の普及活動などを行っている⁴⁶⁾。

南蔵院に対して、地元の人々はどうのように思っているのか。正式な札所として承認されず、裁判訴訟にまでもつれ込んだ普通寺の場合は極端であるが、各札所は不満はあり問題点を抱えていても南蔵院との関係は維持していく必要がある。一方、篠栗には正式な札所以外に、番外と呼ばれる小堂や寺院があり、南蔵院との直接の関係はない。しかし、霊場全体の浮沈は大きく影響するので、南蔵院とも間接的に関係を保ちつつ、独自に活動している。番外は、常に積極的に活動しないと維持できないので、行者や巫女のような霊能祈禱師の活動拠点となることも多く、特別のご利益や霊験・奇蹟などを強調する所も目立つ。番外として独自の祈禱活動を行っている寺の住職A氏（1952年生まれ）に、篠栗の変化と南蔵院について聞いてみた（2009年4月7日）。

「この地域は福岡から肥前や飯塚へ抜ける交通の要所で、豊前への防衛線だった。私はよそ者で、この寺へ来て20年になる。先代もよそ者で、彼は拝み屋であった。南蔵院は八十八カ所霊場の札所を統率しきれなかった。ある札所の人が息子を高野山へ入れて修行させて対抗した。昭和40年（1965）から50年代にかけての篠栗は、遍路さんが増えて、南蔵院も自分の寺もこれに便乗した。今は波が引いているので、潰れる札所も出てきている。盛んだったのは昭和50年代初めで（1975～80）、オイルショック（1973年）の頃から人の動きが流動化した。各家が自家用車を持つようになった時代である。佐賀、筑後、熊本方面からの団体が車で来るようになり、大型バスやマイクロバスも増加した。個人の遍路もあったが、増えたのは団体だった。バブル経済bubble economyの時期（1986-1991）が頂点で、それ以後になると、大型バスがマイクロバスに変わり、遍路は三分の一くらいに減ってしまった。旅館もこの頃にやめた所が多い。自分の寺院の仕事と護摩供養について考えると、イベントを起こさないと人は来ないとつくづく感じる。人に喜んでもらわないと来ない。葬式だけで食っていける檀家寺は何もなくても生きていける。檀家の数が多い寺は年忌供養や葬式で充分食べられる。納骨堂を作ることによって、納骨者の家族が亡くなれば、次の世代の葬式も依頼される。ただし、博多あたりの都市の寺と違って、篠栗の寺院は何か行動を起こしていかないと食えない。拝み屋はお経を上げて、修行もするが、基本的にはカウンセラーだと思う。死を考えたこともない人が、連れあいの死や自分の大病を契機にして、心の拠り所を求めてやってくる。メンタル（mental精神的）に関わるケアcareは医者はや

らないので、こういう所に来るのではないか。神仏の助けを求める部分もあるのだろうが、愚痴をこぼしたいのだ。また『祈り殺してほしい』と言ってきた人もいる。その対象となる人は自分の夫だった。相談に来るのは、50歳過ぎの熟年世代が多い。離婚するのは簡単だが、金をくれない人も多い。遺産はないが、年金と保険はある。でも『はい、あげます』とは言わない。人々の曲がってしまった考えをどのように真っ直ぐな方向へもって行くのが私たちの仕事だと思う。私はまず愚痴を聞く。当人の考えはわからないとは言わないが、間違っているのではないかと言うことはできる。争い事になっても、刃物を持ち出すまでには至らない。もって行く場がない時に『篠栗へ行ってみようか』ということになる。南蔵院の場合は、信者の相談にのっているのは役僧で、最も多い相談は病気のことである。南蔵院では通常は細かく面倒を見てもらえないことを一生懸命にやり、ファンが増えている。行者には札所や行場をはしごする人もいる。自分の寺の先代は、信者から聞かれたことにはっきり答えなかった。それがかえってよかったと思う。」

番外は、拝み屋さん、つまり霊能祈禱師と個人との信頼関係から成立している事例が見られ、番外が八十八ヶ所霊場の札所以上に多くの巡礼者や信者を集めていることも多い。また、番外の堂守の大半は「よそ者」、つまり篠栗の外部から来ている。ここも同様で、霊能祈禱師の小堂に始まり、篠栗の巡礼の増加と共に隆盛に向かい祈禱寺に成長したが、1990年代以降は衰退してきた。葬儀に関わる檀家寺はともかく、祈禱寺はイベントを仕掛けないと人が集まらないという。信者は中年過ぎの人々で、カウンセラーの役目を果たしている。南蔵院の場合も熱心な信者は個人的にきめ細かく対応することで生まれる相互の信頼関係が基本である。信仰というよりも、信頼であり、社会的絆の再構築のためのケアが札所と番外を問わずに重要である。一般化して言えば、社会的関係を構築する過程に神仏という超越的な他者、言いかえれば「第三者の審級」[大澤1994]⁴⁷⁾や「霊威的次元」[池上1999]を介在させることで、相互の信頼度は深まる。最終的には「心」の問題の解決を求めてさまよう人々をどのように導くかが、霊場の実践の全てに通底する原点であるといえる。

13. 寺院と霊能祈禱師

南蔵院と関係が深く、参詣者の多い札所は、第28番札所の大日寺で、堂守は^{れいのうきとうし}霊能祈禱師として名高い庄崎良清^{りょうせい}（本名は清子）が務めている。庄崎は、昭和56年（1981）に南蔵院で得度した。大日寺の代々の堂守は篠栗の外部からやってきた尼僧が務めているのが特徴である。初代は林真光といい、南蔵院で得度して住職の弟子になった。本名はミツで、明治初期に京都伏見の旧家に美しい娘として生まれた。家が借金を抱えていて返済のために京都の祇園で芸妓となる。その後、博多に移り、柳町の料亭の三浦屋で働いていたが、自分の美貌が原因で男同士の争いが起こり殺人事件まで起こってしまったことを嘆いて、人生に無常を感じて南蔵院で出家した⁴⁸⁾。そして、大日寺の堂守となり昭和24年（1949）に亡くなった⁴⁹⁾。境内の閻魔堂の大閻魔像は真光尼の時代の奉納という。二代目は岡本某、三代目は名前不詳、四代目は三宅妙秀、庄崎良清は五代目で、初代から尼僧が続いてきた⁵⁰⁾。

庄崎は1930年、福岡県^{みい}三井郡^{たちあらいまち}大刀洗町^{いまま}大字今に生まれた。隠れキリシタンの伝統を引く村で、生まれながらのカトリック信徒であった。福岡市へ出て24歳で結婚し、二人の娘を授かったが、夫と不和になり、一人で商売に打ち込んで生活を支えた。しかし、身体の調子はよくなかった。49歳になった1979年に突然に神がかり状態になり、「約束どおり命はもらおう」という天の神の託宣が下り、次女の死が予告された。その後、再び託宣が下り、「命を救けてやるから衆生^{しゅじょうさいど}済度せよ。…真言密教、三密加

持でせよ。高祖弘法大師の弟子になれ」と指示された。娘を救うために修行を開始し、背振山や油山など修験の山岳霊場で「百日の行」を行い、次いで「三年三月の修行」に入り、その半ばの1981年6月に背振山の弁財天の前で修行中に「篠栗霊場一番札所、釈迦如来のもとで得度せよ」というお告げが下りた。そこで、突然に南蔵院を訪問して得度を願いでた。林覚乗が対応し、先代の林覚雅と相談することになった。その間、不動の滝で修行して霊界の様相を知る。結局、南蔵院で1981年6月20日に得度して、認められて第28番大日寺の堂守になった。大日寺では、自分の体得した真言密教の世界が、大日如来と閻魔大王によって具体的な姿となって現出していることを知る。「神仏により修行させられ、体験してきたことは、大日寺の世界そのものだったのです」[庄崎2007: 73]。ここに至って生と死が可視化され、守護神仏との究極の出会いが起こった。庄崎は神仏の声を聞き、目に見えない世界が見え、死者の霊や動物の霊も見える。信者が庄崎に悩みごとを打ち明けて相談をすると、神仏への御祈禱の後に、神や仏、そして死者の霊のお告げが庄崎の口から自然に出てくる。これをオミクジという。神仏の「お告げ」、つまり託宣をオミクジという独自の表現で言う。そして、信者に手をかざす「お手当て」によって宇宙の力で病いを治す。数多くの人の病気を治し、奇蹟を起こし、霊の祟りや障りから救った。自ら問題解決の啓示を得て修行も行った。清水観音の滝の修行(佐賀県小城町)、油山の白波の滝の修行(福岡市南区)、十六大羅漢の岩場と滝の修行(福岡市早良区石釜)、「千灯明供養」の修行⁵¹⁾、篠栗霊場の奥之院「若杉山」での寒行(篠栗町若杉)などが主な行場である。悩みや不安を持つ人々は、早朝から晩遅くまで、押しかけてくる。ほとんどが口コミを通じてやってくる。特別祈願(結婚・子授け・病気治し)や、憑き物落とし(犬・水子・死者霊)を依頼される。信者の中には、庄崎を先生として敬慕し、犬や草花や公園の世話をし奉仕している者もいる。多くの人はオミクジの信者で、庄崎と縁ができて、「先生のそばで修行」する信者になった。信者の何人かは得度して、霊場や寺院で修行しており、霊能祈禱師もいる。救われたいとか、強くなりたいと願って修行する行者もいる。信者の年齢は、40歳代から60歳代の女性が大半である。庄崎は行場の他にも伊勢神宮や出雲大社などにもお参りする。

2004年には、南蔵院の林覚乗に同行してスペイン・バルセロナのサグラダ・ファミリア教会 Expiatori de la Sagrada Familia で一緒に仏教法要を営んだ⁵²⁾。その後、モンセラート Monasterio de Montserrat で黒い聖母を拝み、バチカンのサンピエトロ大聖堂 Basilica di San Pietro in Vaticano に参拝し、各地でオミクジを得た。フランスのルルド Lourdes の洞窟の前で出たオミクジは「これからも手伝ってあげよう。信者さんのために働きなさい」「奇蹟は与えてやる」で、衆生済度に生きよということだと悟る。聖体拝領の後に、泉で沐浴をし、千灯明と同じようにロウソクをともした。そこでのオミクジで「(お前の)手からとった水はルルドの水のようになる」と出て、「私のやっている水のことはルルドのマリア様の指示だった」「水に関するオミクジの元はルルドにあった」とわかったという [庄崎2007: 99-101]。庄崎は若い頃からマリアに親しんでいた。三十年を越える活動を通して、宗教の違いを越えた親和力が働き、仏教もキリスト教も人生の辛い体験の力によって飲み込まれている。

庄崎はいつも黒か紺の作務衣を着ての簡素な出で立ちで、質朴な人である。普通の御婆さんの魅力に取りつかれ、人生体験と人柄に惹かれて繰り返しやってくる人も多い。神仏の器として、個人の悩みや不安を短時間に察知し、「共苦共感」の世界を一緒に作りあげていく微妙さは人生体験の深みに裏付けられて可能になると言える。目に見えない世界との共生感覚は、知識よりも体験として時間を掛けて醸成されていくのである。

霊能祈禱師と寺院はどのような関係をもったのか。林覚乗は言う。「南蔵院で得度せよとの啓示を受けたと、庄崎良清師が、突然、寺の玄関に現れたのは1981年（昭和56年）のことでした。滝や山岳で修行をしてきたが、正式に仏門に入りたいということでした。啓示を受けるような霊能のある人は、どこか尋常でない感じのする人が多いものですが、庄崎師はそういう感じはしませんでした。派手さもハツハリもなく、どこか頼りない感じすらしました。けれど、心のうちに秘めたシンの強さがあると直感しました。得度の日に私は彼女にこう申しました。霊能による宗教活動はけっこうです。しかし、信者や相談にきた人の悪い因縁を見る能力があるならば、黙って救ってあげなさい。霊の祟りや障りを言いたてて不安感や恐怖感を与えてはいけません。おどすようなことをしてはならない。そのようなことをすれば破門である、と。というのは、霊能があるという人のなかには、良からぬウワサを耳にすることが往々にしてあるからです。念のためにつけ加えますが、庄崎師についてそうした話は一度も聞いたことがありません。それどころか、欲というものがありません。得度後しばらくして、私は庄崎師を篠栗霊場第28番大日寺の守堂者に任命しました。この札所は、地元が所有しており、代々、尼さんが守ってきました。先代の方は高齢でもあり、庄崎師が着任した時はひどく荒れ果てていたのが実情です。庫裏（住居）とて、人が住めるような状態ではありませんでした。私が感心したのは、庄崎師は自分への布施を、まず本堂と閻魔堂の整備に使い、庫裏の修理はあとまわしにしたことです。数年にして第28番札所は見違えるように立派になりました。これは庄崎師が私心なく神仏に仕えている心の現れだろうと思います。」「庄崎師の信者さんを見てみますと、庄崎師の隣にいただけで幸せという人々です。これからも、修行に励み、教を学んで、信者さんたち本人が、心を変えてしっかり生きられるような霊場づくりに励んでほしいと期待しています。庄崎師のように自分の宗教体験、神秘体験にもとづいて、私心なく人々を救う霊能祈禱師を、私は立派であると思っています。南蔵院で得度したからといって私の弟子ではありません。仏の弟子です。曼荼羅世界の一人として、仏弟子たる自分の役割をしっかり果たしていくことを望んでいます。」[庄崎2007: 7-9]。

林覚乗は、「本人の信仰心や心の豊かさが問題であるのに、金銭の高低の問題に考えるとは嘆かわしい。」とのべ、「霊障を云々し、おどして金をまきあげるエセ宗教に私は強い怒りを感じます。靈感 商法や霊視 商法はその最たるものでしょう。」と糾弾する。「本人の心が豊かになり、自分で立ち直れるようにならねば、霊能で救ってあげたとしても、また問題がおきれば、その人はほかの霊能祈禱師を求めてさまようだけです。」という。

林覚乗は、真言宗の僧侶として、霊能祈禱師を「仏の弟子」として肯定し、曼荼羅世界に包み込むことで許容し包摂する。霊能祈禱者が色々な問題を引き起こすことを承知の上で、信者や地元の人々の支持を素直に認め、民衆の立場に立って共に生きる道を選ぶ。一方、霊能祈禱師にとっては、真言宗という宗派の権威と後ろ盾によって自己の立場を正統化できる。仏教の枠組みにとらわれない、融通無碍な神仏との交流、大師信仰や先祖供養は双方に通底しているのである。

大日寺の主な年中行事は、閻魔堂での閻魔大王の月例護摩（毎月16日）、稲荷社での春の「稲荷大祭」（4月第一日曜日）、夏のお盆明けの「閻魔大祭」（8月16日）である。稲荷大祭や閻魔大祭では、地元の中町の人々が餅や弁当の接待をする。閻魔堂には、日本最大の閻魔大王が祀られていて、脇侍には赤鬼、青鬼、婆鬼を従えている。閻魔大祭はお盆の行事が終わった8月16日に行われ、地獄の釜の蓋が開く日とされる。中町の人々が主体となって準備する。10時30分から南蔵院住職が法要を30分ほど行い、護摩祈禱が行われ、不動真言、閻魔真言、光明真言、南無大師遍照金剛を唱えて祈念する。その後

法話が10分ほど続く。閻魔の本地は地蔵だという。極楽への往生も願われる。庄崎師の挨拶は、「お元氣な顔が映ってうれしいです。これからも皆様と一緒に一日一日を大切に修行したいと思っています。南蔵院さま、ご先祖さま、心願成就。」。この日は一年のうちで、大日寺が最も賑わいを見せ、多くからの参拝者だけでなく、地元の人々の参詣も多い。信者の中には神がかり状態になって閻魔大王と直接に語り合う人もいる。大日寺での願い事は、先祖供養、商売繁盛、病氣平癒、身体安全、交通安全などで、絵馬には、悪魔退散、厄除け、戦没者供養、因縁消滅、就職祈願、良縁祈願、水子供養、あるいは「夫が遊びをやめて一生懸命仕事をしますように」という願い事も書かれている。2009年の参拝者は400人で、弁当は350人分を用意したという。

篠栗の各地では、庄崎良清のような巫女や行者が多くいて、人々の悩み事に応える霊能祈禱師として活躍してきた。篠栗は「小盆地宇宙」の地形をなしており、各所に点在する霊場の札所には、弘法大師の霊力が遍く行き渡っているとされ、霊能祈禱師を生み出しやすい風土性がある。真言宗には弘法大師を「入定留身」とし、高野山奥之院で、生きたまま我が身をこの世に留めて祈り続けているとする信仰があり、弘法大師信仰に内在する「遍在性」と「生き神」の要素は、民間信仰に適合的であるだけでなく、宗派や宗教を越えて民間に受容される素地となっている。他方で、信者や相談者の目は肥えていて、霊能祈禱師の素質を見抜き、能力を冷静に評価する。その結果、霊能祈禱師の浮沈は日常茶飯事で、長期間の活躍はかなり厳しい。庄崎はその試練を乗り越え、南蔵院との良好な関係を保ちつつ札所と祈禱場を両立させてきたのである。

14. 地域社会を越えて

篠栗新四国霊場は、全盛期に比べると確実に参詣者は減少している。人々の信仰意識の変化や、交通網の発達に伴う利便性の向上、経済活動の停滞など、社会・経済・宗教の様々な要因によって衰退の兆しがある。現状打開の施策は様々に講じられてきたが、大きな流れを食い止めることは出来ない。しかし、近年になって新しい動きが生じた。それは地域を越えて、広く外部と繋がる展開で、全国の弘法大師霊場との連携である。日本の全国各地には、新四国八十八ヶ所霊場が多数あるが、その中でも、篠栗、知多（愛知県）、小豆島（香川県）は「日本三大新四国霊場」とされている。相互の連絡はほとんどなかったが、2000年代に入って相互研修や団体参拝などの交流が始まり⁵³⁾、2008年には本格的に三霊場が一度に会する催事が、8月27日から31日まで5日間、知多半島にある中部国際空港（セントレア）Chūbu Centrair International Airport（愛知県常滑市）で行われた。中心行事として、「日本三大新四国霊場お砂踏み」が開催された。この催事は、2008年に開創200周年を迎えた知多の新四国霊場⁵⁴⁾の記念行事の一環で、知多霊場会が霊場相互の交流推進と「巡拝の輪」を広げたいとの願いから、篠栗霊場会と小豆島霊場会に共催を申し込み、合わせて各地の霊場会に参加を呼びかけて開催した。国内初の空港での開催で、空港センターピアガーデン1・2階に全長約180mの会場が設置され、連日午前中は2時間待ち、午後には4時間、5時間待ちの盛況で、5日間の来場者数は約21000人に達した。

28日はセントレアホールで、三霊場の代表者による講演会と第1回「全国大師霊場サミット」が行われた。講演会には、知多四国霊場会会長の長谷川実彰（第71番大智院住職）、篠栗四国総本寺南蔵院の林覚乗住職、小豆島霊場第74番圓満寺の瀬尾光昌住職が登場し、サミットには呼びかけに応じた、北は北海道、南は五島列島に至る18の霊場から約70人の関係者が出席し、各霊場の歴史や活動紹介を行って、情報交換を行い、霊場巡拝の将来像を探った。開催の趣旨は、「本来の巡拝の意義を理解し、各霊

場のよさを再確認しあい交流を深め、信仰・健康・観光を充足させる次代の霊場巡拝のあり方を探り、各霊場の発展と全国に巡拝の輪を広げる一助になることを願い、開催するものです」とある。最後にセントレア・アピールとして、「今後も各霊場の発展と全国に巡拝の輪を広げる為、たゆまぬ精進を誓う」を採択して終了した。期間中は、知多、小豆島、篠栗の三地域物産展が開催され、写経、護摩木奉納が行われ、サミットに参加した霊場の紹介コーナーも設置された。

2008年の催事の目玉は、センターピアガーデンで開催された「お砂踏み」で、霊場の各札所のご本尊掛け軸を奉り、札所境内の砂を軸前の足元に敷いてあり、砂を踏んで礼拝すると三大霊場、総計で265ヶ所を巡礼するのと同じご利益が得られるとされ、巡拝者には「満願證」が授与された。4時間待ちも生じるほどの人気となり、高齢者、中高年だけでなく若い女性も多数参加した。28日だけで約3万人の方が訪れて広い空港の建物内がごった返したという。平成の「出開帳」は成功したのである。「三地域物産展」も売り上げを伸ばし、篠栗から持参した土産品はあっという間に売り切れた。目的は物産販売と土地の宣伝にあったので、十分に効果があり、今後は5年に1回、場所を変えて開こうと申し合わせた。「霊場巡りは健康、観光、信仰の功德がある」というキャッチフレーズの効果が、今後試される⁵⁵⁾。

2008年「お砂踏み」の宣伝用ポスター（図5）には各地の代表的風景が使われた。言うまでもなく、篠栗は南蔵院の「釈迦涅槃像」が使われており、建造以来20年もたたないうちに、篠栗を代表する風景として定着し、「創られた伝統」の表象となった。三霊場のポスターの風景は、涅槃像、浜辺の辺路、弘法大師であり、奇しくも、死から生へという再生の道、あるいは生から死へという人生の道の物語を描き出していた。今回の催事の主催者側の期待は、霊場の観光宣伝と物産販売という経済効果であったが、ポスターは宗教メディアとして、濃厚なメッセージを人々に送り届けた。「お砂踏み」は、本四国の写し霊場の更なる写しという二重性と、三霊場の結合による写しという三重性を合わせて、どこにも



図5 「日本三大新四国霊場お砂踏み」ポスター

ない霊場を一時的ではあるが新たに創出した。人々は、霊場巡拝の究極の主題は「時の流れ」であり、それを体感するのは死と再生が交錯する「道の宗教性」であると感じ取ったのかもしれない。イベントにもかかわらず、弘法大師霊場という庶民信仰を介して、地域と国全体を結合させて民衆の共感を得た。今後の生きる道をこの催事は顕著に示したと言える。

15. 終わりなき増殖

南蔵院は時代の風潮を素早く察知し、社会の変化に応じて変貌を重ねてきた。その働きの中核にあるのは「外部性」である。外部の力を様々に活用し、地域社会の内部を変えていくことで、自らも変わる。元々は、高野山の寺院であり、篠栗に移っても、「外部性」の刻印は消えることはなかった。地域社会の外部から内部へと分け入り、次第に周縁性を薄めつつ、中心へと登りつめたが、外部との接点は常に開いている。その成長にあたっては、新四国霊場に特有の「お接待」の慣行が活動の根拠として強力に作用した。恵まれない人への無償の施しは、精神的な相互作用を生み出す。南蔵院の確立にあたっては、地域社会からの援助もさることながら、遍路、炭抗夫、朝鮮人、被差別民、霊能祈禱師など、外部や周縁の人の助けも大きかった。南蔵院は、地域社会の内部と外部を巧みに結合し、「近代化」の状況に対峙して、時代と共に生きてきた。内部と外部が交錯し、相互を媒介すると共に乗り越える場所が南蔵院なのである。滝と川と森を背景として、境内に溢れる地藏、観音、不動、稲荷は、庶民の身近な信仰対象であり、神と仏は自然界の中で微妙に混淆し、人間は神仏と多様な出会いをする。そして、本堂内に祀られる本尊の釈迦如来に対して、野外にあって第二の本尊とも言える「釈迦涅槃像」は、新たな他界の風景を現出させ、納骨堂の導入によって死者供養や先祖供養が展開することで、現世と他界の接点の様相を深めてきた。南蔵院は、人間の生と死に関わる多重の境界性を基盤に、終わりなき増殖運動を展開してきた。そして、存続のためには常に新たな活動を起こしていかなければならない。

南蔵院は本質的には祈禱寺であり、活発に活動し、新しい信者も沢山集めている。檀家寺の場合は、特に積極的に活動しなくとも、ある程度の檀家がいれば、葬式と死者供養で生活ができるが、信者との緊張関係を失わせた。檀家には寺院を選択する余地がないことが問題なのである。祈禱寺は基本的には檀家を持たない寺院であったが、近年は徐々に檀家寺の形式を採用して信者を取り込む寺院が増えてきた。篠栗では、南蔵院、遍照院、明王院（養老の滝）などは、現在では先祖供養や水子供養、そして葬式を行い、墓地や納骨堂を所有するまでになった。その中でも南蔵院は規模が大きく、死者供養の取り込みだけでなく、時流の流れを読んで、新しい企画をたてて活動する流動性と柔軟性を持って、世の中に貢献しようと考えている。現代風に言えば、南蔵院は仏教が社会活動や環境問題や福祉などに関わり合う「社会参加型仏教」、つまりエンゲージド仏教 Engaged Buddhism (Socially Engaged Buddhism) の小型版を展開していると言える。これまでも、既成仏教の教義の枠組みにとらわれず、少子化や高齢化が進む日本社会に対して、実践的に取り組み、民間信仰を巧みに取り込んで民衆の願いにこたえようとしてきた。今後、働き掛ける対象を広げて、多次元の公共性 multi-dimension of publicity とでも呼ぶべき外部とどのように関わるかは課題として残されている。その根底には寺院が「社会関係資本」 social capital [パットナム 2006] として、個人、地域社会、外部などと「信頼」「規範」「ネットワーク」をどのように構築するのかという究極的な問題がある。

福岡市近辺の人々は、何か不幸が続いたり、うまくいかないことが重なると、「篠栗へ行ってみようか」という^{ふじたしょういち}藤田庄市の言葉を借りれば、篠栗は「霊能地帯」であり、都市民の不安に対応している

のである⁵⁶⁾。日本全体を視野に入れると、篠栗は大阪市近郊の生駒山に次いで、様々な宗教者や霊能祈禱師が活発に活躍する場になってきたという。大都市と近郊の山の霊地は相互依存の関係にある。篠栗の場合は、根源に九州北部に展開してきた、英彦山、求菩提山、宝満山、背振山、雷山、油山などを拠点とする山岳信仰を核とする修験の活動がある。その風土を基盤に、善隣会⁵⁷⁾や中山身語正宗⁵⁸⁾などの新宗教教団も生まれている。宗教心の底流には、自然との深い交流により精神性を深めていく場が必要である。山に登り、滝にうたれ、森を歩き、神仏に導かれ、目に見えない世界と交流する。その根源には霊力の源泉としての山があった。若き日の弘法大師は、山林修行者と共に歩んだという。僧侶と民衆を問わず、大師信仰は宗派を超えて広がっていく。篠栗は自然への畏敬と大師信仰を結びつける絶好の場であったといえる。南蔵院の活動の源泉には、外部の影響をほどよく受け入れ、内部に神仏との邂逅の密度が高い「小宇宙」を築き上げてきた篠栗の独自の風土があった。移動性に富む巡礼という実践も、外部を積極的に受け入れて、現代社会との適合性を持ち、寺院活動を包摂して展開してきた。

南蔵院の活動は、商業的すぎるとして多くの批判を生んでいるが、森や滝や川などの自然を背景として、大師信仰と先祖供養を結合させ、仏教寺院の近代化に成功したといえる。現在では、地域社会にとってはなくてはならない存在であり、宗教活動とビジネスとメディアを結合した新しい寺院と見ることができであろう。しかし、その手法の根源は意外に単純である。過去の経験や知識を最大限に活用し、世の中の動きに敏感に対応して行動することに尽きる。鶴のように時代と対峙する緊張関係や流動性が今後も維持されるかどうかは分からないが、信者や地域社会との密なるコミュニケーションを活用していくことで生まれる智慧が、次世代への道を切り開く鍵であることは確かである。

註

- 1) 本論考はフランス国立極東学院と慶應義塾大学の共同研究プロジェクト「外と内の相互力学—外部性による社会と文化の創造—」(代表: アンヌ・ブッシィ Anne, Bouchy) の成果の一部である。研究期間は2004年から2010年までだが、断続的に継続している。
- 2) 慈忍以前に既に篠栗の霊場化の動きは始まっていた。享保4年(1719)に福岡藩士の平井勝幸が篠栗に来て大乘經典の經文を一石に一字ずつ記して地中に納めて、供養宝塔を建てた記録が「桐生家文書」にある(『祈り 篠栗四国霊場展』篠栗町立歴史民俗資料館, 2007)。明治28年7月(1895)に田の浦に設置された藤木藤助翁の顕彰碑の碑文には、平井勝幸の事績を述べた後、天保6年(1835)に慈忍が霊跡を尋ねて城戸に住まいし、四国霊場の写しを作る発願をして、「衆生済度ノ冥福ヲ禱ラント。自業猶未ダ尽キズ、却テ他ノ障碍ヲ被コト、佛像僅カニ、十有八軀ヲ勧請シ、其志成就アタワズシテ終リ、慈忍ハ故有テ失踪ス」と記し、その後藤木藤助が慈忍の志を継いで霊場を完成させたとある。天保5年(1834)は弘法大師入定千年大遠忌で、篠栗霊場の開創の発願と関連があるかもしれない。また、東国では天保大飢饉が天保6年(1835)から天保8年(1837)まで続き、その救済の願いを籠めたとも考えられる。篠栗の巡礼についての考察は[中山2000, 2008]を参照されたい。
- 3) 霊場の開創には様々な伝説がある。林覚雅の『史跡案内』には、本四国八十八ヶ所霊場巡拝の帰途に、篠栗に立ち寄ったのが始まりで、城戸の人々が疫病に悩まされている人々を見て、不動の滝に入り、飲食を断って祈禱すると、霊験が現れて疫病が治り、人々の尊崇が一身に集まった。慈忍は弘法大師の実証を得た霊地として八十八ヶ所霊場の創設を発願した。しかし、仏像彫刻の寄付金勧募の途中で亡くなった。その志を藤木藤助が継いで霊場を完成させたとある[『篠栗町誌 歴史編』1982: 243-244]。
- 4) 当時の会員は25名で南蔵院は含まれていない。
- 5) 本寺として迎える試みを行った者は12名とされる。地元では「七人の侍」と称される家が山畑や田圃を寄付して南蔵院を作ったと伝える。南蔵院は毎年1月10日の鏡開きにこの七人の子孫とされる人々を招待している。
- 6) 県令に関する確実な史料はない。ただし、札所の合祀状態を解消して一札所一本尊とする『新四国八拾八ヶ所新設地墊取』を明治34年(1901)5月に完成し、南蔵院を各札所の一坪地主として全札所を南蔵院の飛地境内

とする『南蔵院飛地境内編入願』を作成して同年10月に届け出た。「八十八ヶ所仏堂明細帳編入願南蔵院飛地境内トシテ」許可が得られたのは明治35年(1902)から明治40年(1907)年にかけての交渉の後であった。明治40年12月20日付けて「飛地境内編入契約書」が締結され、南蔵院への札所敷地寄附の手続きが進められた。その後、博多高嶋屋の木原喜造が札所や遍路道の整備に浄財を寄付している。

- 7) 行空は建永元年(1206)2月、佐渡へ配流され、法然はやむなく破門にしたという。『高野山本覚因並ニ筑後国檀縁由来』[『星野村史 文化財民俗編』1997]によれば、行空は高野山に講坊を開創し、文永年間(1264-1274)に筑後の星野村で亡くなったとある。福岡県八女市の星野村黒木谷に高野堂「行空上人の墓」があり、筑後と高野山は関係が深かったことが南蔵院招致に繋がったのかもしれない。
- 8) 明治28年(1895)の『新四国八十八ヶ所台帳』(桐生源四郎の調査)には、「城戸川端堂」と記され、仏体寄付者は城戸の吉富嘉平、土地の持ち主は桐生福次郎とある。
- 9) 明治37年(1904)には『篠栗四国導和讃』(草場千代吉作)が作られた。ここでは「篠栗四国の霊場は 西の高野と唱え来て 深き因縁の有るぞかし 仰げば尊き霊場ぞ 大師帰朝のその砌り 錫を此地に止められ」と詠唱されていた[『篠栗町誌 民俗編』1990: 137]。若杉山の太祖宮の縁起には異伝が多いが、善無畏の開山や、弘法大師空海の留錫などの伝承は共通し、弘法大師礼賛や仏蹟再興の機運の高まりに伴って、奥之院や独鈷水への参拝者は増加した。若杉山は篠栗新四国霊場では当初は「番外」に組み込まれたが、徐々に重みを増し、霊場の「奥之院」に位置付けられるようになり、復興をなしとげる原動力となった。若杉の詳細については[鈴木2013]を参照されたい。
- 10) 明治25年(1892)に津波黒炭坑を創設(明治41年に高田炭坑と改称)、その後高田字宮ノ前に向田平岡炭坑が創設された。明治37年(1904)に篠栗駅が開業し、石炭輸送の手段が確保された。大正6年に安川財閥の明治鉱業株岸会社が明治区の高田炭坑を買収し「明治高田鉱業所」を開業、昭和35年(1960)4月30日の閉山まで続く。同年には庄に「篠栗炭坑株式会社」が設立され、巨大なボタ山が出来ていく[『篠栗町史 民俗編』1990: 7]。
- 11) 本人は元々炭坑関係者で、福岡から北海道の夕張に移住して、現在は札幌在住だという。この賞は高松市と文藝春秋が主催で贈呈していたが、現在は行われていない。
- 12) 本会の前身は明治31年7月13日付け結成の金剛会で、会員は25名、南蔵院の名はない。
- 13) 覚雅は四男で、長男の慧一は養子に行き、次男の大象は映画に関わった。三男の真喜三は、明治大学を卒業し、写真好きで現像もした。鹿屋の海軍基地の特攻隊にいて、1945年5月4日に指宿から「水上艇」(下駄履き)で出撃して死亡した。林覚乗が、1995年4月に公開された戦後50年記念の東映映画『きけ、わだつみの声』に出演したのはこの縁による。長女の英代の夫は会社員である。
- 14) 1920年にはアメリカに輸出されて全盛期を迎えた。一時期パラフィンparaffinに押されたが盛り返し、1960年代に化学整髪料の登場で危機に陥ったが、コピー機やプリンターのトナーに新たな活路を見出した。現在の社名はセラリカNODAである。
- 15) 当時の状況は祈禱中心で、死者供養は行っていなかったと推定される。
- 16) 北九州の小倉紫雲閣を拠点として葬祭会館を運営し、ホテル・結婚式場の経営を行い、冠婚葬祭にかかわる一切の事業を行っている。1966年11月に会社を設立した。林覚乗が死者供養に乗り出した際にアドヴァイスを得た可能性もある。
- 17) 原型は仏師の山高龍雲(1948年生)に依頼し、現在も納骨堂の月華殿内に安置されている。山高は20歳で父の松雲を継いで仏師となり、神戸市の須磨寺を拠点にして仏像彫刻の薫風会を主宰し、南蔵院でも彫刻会の運営にあたっている。林覚乗の弟の弘三は現在の須磨寺の管長で前管長の小池義人の養子に入った。南蔵院と須磨寺の関係は深い。
- 18) 日付はいずれも営業許可日である。
- 19) 一般拝観は9月2日(土)からであった。
- 20) 仏足跡の崇拜は、仏像出現以前の礼拝方式である。日本でも仏足石への信仰はあり、奈良薬師寺のものは名高いが、余り多くない。南蔵院の釈迦涅槃像のような仏像の設置は他に類例がない。仏の三十二相の一つに「足下千輻輪相」があって、足の裏に転法輪が表され、釈迦が説法して諸国を巡錫し、法の輪が連なることを意味する。
- 21) 平成8年(1996)以来、毎年5月に社員の供養が住職を導師として行われる。位牌には「理研産業株式会社物故

者之霊」とある。

- 22) 日本にある「耳塚」の韓国への移管運動、大量殺害事件の執行者キム・ヒロ（金嬉老Kim Hiro）の仮釈放に尽力するなど社会的に活動する僧侶である。
- 23) 林覚乗はバク・サムジュンに対して、10周年記念法要にベ・ヨンジュンの祝辞をお願いしたいと依頼したが、バク・サムジュンはベ・ヨンジュンと面識はない。彼はカトリック（天主教）信者で、仏教の祝賀行事に祝辞は寄せないと考えたが、事務所に連絡した。返事は快いものではなく、諦めていたところ、突然にベ・ヨンジュンからサイン入りの写真が送られてきたという。この写真は現在も釈迦涅槃像の胎内に飾られている。
- 24) 扉付きで箱状の納骨壇ではなく、骨壺は数段の棚の上に並べておく。
- 25) 永代使用料とは、墓のたっている土地の使用権を購入することを意味する。実質は「永代使用権」の購入である。南蔵院が永代供養を始めたのは平成元年（1989）である。
- 26) 林覚運の時代の檀家で、大宰府2軒、篠栗1軒、福岡市城南区1、筑紫野市2軒だという。盆の時には棚経に行く。
- 27) 安楽寺は大宰府七大寺の一つで、伝教大師と弘法大師が滞在したとされ、境内に菅原道真公を祀る天神社が創建されて、神仏習合の「安楽寺天満宮」となった。安徳天皇も参拝したと伝える。しかし、明治初年の廃仏毀釈で廃寺となって、観音堂のみが残され荒廃した。本寺の初代の村上賢亮は、再興を志して、昭和45年に霊園を開園した。二代目住職の諸山隆瑞は志を継ぎ、平成4年に堂宇が完成して、大宰府から本尊の阿弥陀如来をご遷座した。宗派は浄土宗であるが墓は宗派を問わず受入れ、2650基に達している。ここには硫黄島で玉碎した戦死者を祀る慰霊碑もあり、毎年3月に法要が営まれる。
- 28) 実際には銀行員が宝くじが売れないので寺に持ち込み、400枚買った中から当たった。
- 29) 2010年5月25日に放映の「スーパーJチャンネル」（テレビ朝日系列）で紹介された。
- 30) パワースポットは、1974年のユリ・ゲラー（Uri Geller）の初来日を期にマスコミに超能力者として登場しスプーン曲げなどを行った清田益章の造語とされ、『発見！パワースポット』（太田出版、1991）で「大地のエネルギーを取り入れる場所」として提唱された。その後、1990年代を通じて「パワー」を得る場所とされ、2000年代には癒しの効果があり気持ちの落ち着くスピリチュアルな場所として若者の間に広まり、神社仏閣を巡る者が増えた。最近のブームで『超能力者清田益章が選ぶ 本物のパワースポット』（学研パブリッシング、2010）が出版されている。元々はかなり怪しげだったが、現在では普通の言葉となり、伊勢神宮ではパワースポット効果で参拝者が増大した。
- 31) 文治元年（1185）に壇ノ浦で敗北した平家の落武者が安徳天皇を奉じてこの岩に隠れて追手の敵から逃れた。そこで滝に不動明王を祀った。祈願者の願いに応え禍を救うと言う。境内の最古の不動明王像は昭和8年（1933）である。
- 32) 国廣秀峯（1936-2007。本名は勝己）は鑿と槌による手彫りの石仏師として知られ、「石に温かさややさしさを彫り込む」ことを信条に、北九州を拠点として各地に作品を残した。熊本県の水俣のチッソ公害で亡くなった人々を悼む地藏などを制作した際にも指導を行った。作品は『国廣秀峯作品集 石彫』（グッド・アート社1988）に収められている。
- 33) ドイツ語のVerkitschen（低俗化する）を語源とする。低俗や悪質を意味する美術用語で、石子順造は「悪趣味」と解した。大衆文化のポップ・アートやポストモダニズムで実験的な活動もさす。
- 34) 施餓鬼供養は不動滝下の札所前で行い、祭壇を沢に向けて設置し、正面左手に青いバナナ、右手にみかんを盛る。左右に花を生ける。法要の後、なすときゅうりを刻んだものと、茶葉にお湯を入れたものを大きい器に入れて、沢にかかった橋の上からまいて餓鬼に施す。僧侶二人、手伝い一人で、林覚龍が儀礼を執行する。施餓鬼に引き続き灯籠流しを行う。昨年は供養に引き続き執行したが、2009年は15時30分から月華殿にて行った。
- 35) 東大寺の大仏殿で行う行事を模倣して始めた。年末風景としてテレビや新聞で報道されることも多く、寺院の宣伝には格好の行事である。
- 36) いずみ観音祭（3月）は2000代に消滅した。
- 37) 神戸市須磨在住の彫刻師で、釈迦涅槃像の原型製作者である。
- 38) 2010年には壱岐・対馬・五島からも漁業関係者が集まって、ブリやタイが奉納され、塩鯖の接待は5200匹であったという。
- 39) 秀峯は「わらべ地藏」の生みの親であるが独特の人生を辿った。福岡市博多区御供所町で石工の家に生まれ、安永良徳に師事し、石像彫刻師になる。昭和40年に中津八面山に釈迦涅槃像を刻む。「わらべ」の原型は昭和

41年(1966)頃に筑紫郡那珂珂で幼稚園生の姿を見て構想し、庭に置く装飾品として作成した。信貴山浄福院に「七福神わらべ」として納めた。昭和50年頃、福岡県筑紫野市(旧二日市)の薬師院(天台宗)へ「わらべ」として納品した。蓮台に乗せず、白毫もつけず、仏像という性格を持たせず儀執にも従っていない。しかし住職の尼僧に「わらべ地藏で良いのではないか」と言われ、「わらべ地藏」として作るようになった。現在では各地に広まっている。

- 40) 多くの地藏は大半が国廣秀峯の創作作品である。伝統的な造像としては、苦行釈迦像と十六羅漢像がある。総計で48体が境内に祀られている。
- 41) 案内には、「願いをこめて自分の好きなお地藏さまを持ち上げてください。軽ければ願いがかない、重ければもう少し努力する様にと教えて下さるお地藏さまです。いい加減だと言訳がでる。中途半端だと愚痴がでる。一生懸命だと知恵がでる。」とある。
- 42) 日常の寺院でのお勤めは、息子で副住職の林覚竜(1979年生まれ)が行うことが増えている。カリスマ性を持つ現住職の路線は次の世代では変化することが予想される。覚竜の嫁は宝塚出身で南蔵院にまた一つ話題性を付加した。
- 43) 同じ話は[林覚乗1993: 24]に掲載されている。
- 44) 昭和13年(1938)生まれで、久留米大学医学部を卒業し、九州大学医学部循環器内科に入局、同大学助手を経て、昭和47年(1972)より現職である。福岡県保健医療協会理事を務める。病院は2005年に開業から250年を迎えた。
- 45) 掛軸墨書朱印, 掛軸朱印, 納経帳墨書朱印, 納経帳朱印, 重ね印, 白衣朱印である。
- 46) 平成16年(2004)以降は会報『法青』(年2回。平成17年第31号より年1回)を出して広報活動をしている。年中行事としては、篠栗霊場開き(3月), 大人寺子屋(3月), 子ども寺子屋(7月)[小学生・中学生対象], 寒行托鉢(12月。歳末助け合い), 鯉のぼり供養, 出開帳, 演劇布教などを行っている。
- 47) 第三者的な超越性を帯びた他者は、単なる「他者」ではなく、特別な他者、「第三者の審級」であるという。ジャック・ラカンの影響を受けて構築された概念である。
- 48) 境内には、昭和2年夏に、博多の鳥懷石料亭「新三浦」(明治43年(1910)創業)の経営者が鶏供養碑を建立しており、真光尼との縁によるものである。
- 49) 小説仕立てであるが、林真光尼の人生については、[横田1982]に描かれている。
- 50) 閻魔堂内に歴代の堂守の写真があるが、第三代目は抜けていて、確定できない。
- 51) 千本のロウソクをいっぺんに立てて火をともし、先祖の霊を供養する。心をこめて行くと、霊は仏の世界に行きやすくなるという。
- 52) 林覚乗と教会の主任彫刻家の外尾悦郎(1953年生まれ)が中学の同級生で、そのご縁で法要を地下の礼拝堂で営むことになった。
- 53) 平成12年(2000)5月に篠栗から知多への視察研修があり、翌年に知多から篠栗へ、その後は毎年のように交流が行われてきた。
- 54) 文化6年(1809), 妙楽寺(現在79番)住職の亮山阿闍梨が、弘法大師の夢告により発願し、四国の巡拝を重ねて、岡戸半蔵・武田安兵衛という二人の行者の協力を得て開創した。
- 55) 平成23年(2012)9月17日から19日まで博多スターレーン2階特設会場で、「日本三大新四国霊場“お砂踏み”一東日本大震災鎮魂と復興の祈り」が開催され、三地域の観光物産展や写経体験が行われ、三日間で2000人が訪れたという。主催は小豆島霊場会(香川県), 知多四国霊場会(愛知県), 篠栗四国霊場会, JA粕屋が農産物や加工品の販売を行うなどイベント化した。平成26年(2014)は本四国の霊場が開創1200年を迎え数々の行事が展開し、小豆島霊場も同年に開創したとされているので記念行事が予定されている。
- 56) 藤田庄市の開書き[庄崎2007: 198]の解説で「霊能地帯」の言葉を使っている。
- 57) 力久辰斎(1907-1977)を教祖とし、1947年に佐賀県に瑞鳳園精神修養道場を開創し、1948年に教団名を天地公道善隣会に改称した。1960年に福岡県筑紫野市に本部を設立し善隣会と改め、1992年に善隣教に改称して現在に至る。
- 58) 木原覚恵(1870-1942)を教祖とし、佐賀県三養基郡基山町に本部を置く真言宗系の新宗教で、大正元年(1912)に覚恵が弘法大師の口を通し、「おじひ」(身に正しく如来の語)を授かったとして立教した。昭和21年(1946)に第二世管長の覚照が高野山真言宗より独立した。

参考文献

- 池上良正 1999『民間巫者信仰の研究—宗教学の視点から—』未来社, 東京.
- 大澤真幸 1994『意味と他者性』勁草書房, 東京.
- 合屋武城 1957『筑前 若杉郷土誌』私家版, 篠栗.
- 佐々木哲哉 1976「レポート篠栗新四国」『西日本文化』西日本文化協会, 福岡, 123号, 6-9頁.
- 庄崎良清 2007『おみくじ—神仏の器となりて—』(写真・聞き書き: 藤田庄市) 私家版, 篠栗 (初版, 1993. かど創房, 福岡).
- 菅 直子 2010「パワースポットとしての神社」石井研士編『神社はどこへ行くか』ペリかん社, 東京, 232-252頁.
- 鈴木正崇 2013「民俗社会の持続と変容—篠栗町若杉の事例から—」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第76号, 83-140頁.
- 中村守巳 2004「八木山峠 映画シナリオ [第一稿]」『戯曲春秋』17号, 3-175頁 (初出: 「八木山峠」『文藝春秋』218号, 1997).
- 中山和久 2000「巡礼と行場の関係—篠栗新四国霊場を中心として—」『山岳修験』日本山岳修験学会, 東京, 第25号, 58-71頁.
- 中山和久 2008「模倣による巡礼空間の創造—篠栗四国霊場の表象と実践—」『哲学』慶應義塾大学三田哲学会, 東京, 119集 (文化人類学の現代的課題II) 65-109頁.
- 西 義助 1992『ささぐり くらしの四季』私家版, 篠栗.
- 林 覚雅 1983『仲良うしんしゃい』国書刊行会, 東京.
- 林 覚雅 1995a『子育て説法』(とっておきの法話・説法シリーズ1) 国書刊行会, 東京.
- 林 覚雅 1995b『嫁姑の説法』(とっておきの法話・説法シリーズ2) 国書刊行会, 東京.
- 林 覚雅 1995c『人間関係説法』(とっておきの法話・説法シリーズ3) 国書刊行会, 東京.
- 林 覚雅・佐久間進 1986「生きがいは自分の手で」(対談)『九州・篠栗霊場の旅—弘法大師の世界—』読売新聞社, 東京.
- 林 覚乗 1993『自分が好きですか』西日本新聞社, 福岡.
- 林 覚乗 1997『心ゆたかに生きる』西日本新聞社, 福岡.
- 林 覚乗 2002『しあわせを感じる喜び』文芸社, 東京.
- 林 覚乗・三野原厚 2005「人が生きるうえで感じる幸せとはなにか」『街道』(対談) (泯江堂三野原病院創立270周年記念誌) 三野原病院, 篠栗.
- 横田豊次 1982『懺悔の鉤—林真光尼伝—』葦書房, 福岡.
- パットナム, ロバート 2006『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』(柴内康文訳) 柏書房, 東京 (Putnam, Robert, D. 2000. *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon & Schuster).
- 『祈り 篠栗四国霊場展』2007, 篠栗町立歴史民俗資料館.
- 『篠栗町誌 歴史編』1982, 篠栗町教育委員会.
- 『篠栗町誌 民俗編』1990, 篠栗町教育委員会.
- 『星野村史 文化財民俗編』1997, 星野村教育委員会.